

再刊
日本立志編

名修身規範
上河岸貫一著述



門
號 380
卷 2



日本立志編卷二目次

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ツルノ基本ナ

ヲ叙ス

第一

源義家兵法ヲ學ヒシ事ニ

第二

越前少將舞ヲ觀テ號泣セラレシ事ニ

第三

中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事ニ

第四

長沼宗敬儒學ニ志シ兵學ヲ窮メシ事ニ

第五

熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成

第六

岡崎李民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事ニ

第七

谷松三介勤苦志ヲ求メシ事ニ

日本立志編

卷之二

目次

明治乙未年九月二十二日

大隈信常氏寄贈

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈ヒガリシ事
三十三

第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學ヒシ事
三十三

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事
三十四

第十一 雨森芳洲年八十一始テ和歌ニ志セシ事
三十四

第十二 太宰純菅麟嶼ヲ規セシ文
三十八

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ龜モ志ヲ折カザリシ事
三十一

第十四 杉山某明ヲ失シテ龜ニ志シタル事
三十三

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後ヲ詩學ニ志セシ事
三十三

第十六 佐久間彦四郎年卅六ニシテ學ニ志セシ事
三十五

第十七 小川信成勸學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事
三十六

第十八 山中猶平告ケスシテ桑梓ヲ離レシ事
三十八

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事
三十九

第二十 田邊希文孟子ヲ讀スルヲ聞キ志ヲ立テシ事
四十一

第二十一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事
四十二

第二十二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事
四十四

第二十三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ封究セシ事
四十五

第二十四 藤鈞寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事
四十六

第二十五 休翁晚年國歌ニ志セシ事
四十八

第廿六 糟谷半之丞篤志ニ由テ國風ニ長セシ事 甲九丁

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事 五十二丁

第廿八 山岡紀一郎志ヲ槍法ニ專ラニセシ事 五十三丁

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰テテ學ニ志セシ事 五十四丁

日本立志編卷二

千河岸 貫一 撰述

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ルノ基本ナル

コヲ叙ス

凡ソ人ノ爲スアル、必ズ先ヅ之ヲ爲スノ前ニ當テ、將サニ之ヲ爲サントスルノ志アリ、苟モ其志無キ、恰モ穀ヲ設ケズニテ射ルガ如シ、而シテ其志ス所昇近ナル者ハ、其至ル所亦昇近ニシテ、其志ス所高且ツ大ナル者ハ、其達スル所亦高且ツ大ナル、故ニ古來有爲ノ士ハ、必ズ少ニシテ高遠ノ志ヲ懷キ、終ニ常人ノ到ル能ハザルノ地位ニ達ス、然レハ則チ人間百ノ事業志ヲ以テ基礎トセザルハ無シ、殊ニ

惟ム今世ノ人士志嚮先ツ定ラズシテ。或ハ製造物産ニ興
殖セントシ。或ハ商估貿易ニ從事シテ利ヲ得ントシ。或ハ
文章議論ヲ以テ一世ニ鳴ラントシ。朝タニ夜々スル所ノ
事モ々々ニ已ニ之ヲ厭棄シ。昨ノ敢テ顧ミザリシ所モ今
ハ頗ル思念ヲ傾ク。是恰カモ基礎無キノ建築ノ如シ。假令
結構宏大ナリト雖。忽チ風雨ノ爲メニ傾覆シ破壊セン
。夫レ人ノ志ハ。之ヲ養ハザレバ長セズ。況ヤ社會ノ風
潮ニ簸蕩セラレ。其志ヲ挫折スルヲ。嫩芽ヲ摘盡シテ其
艸木ノ長生ヲ望ムト何ゾ殊ナラン。而シテ志漸ク長大ナ
ルニ及テハ。勢力當ル可カラズ。三軍帥ヲ奪フベシ。匹夫其
志ニ奪フベカラズトハ。此之謂ナリ。且夫世人ガ動モスレ
バ。眼前ノ小利ニ眩シ。小安ヲ謀リ。終ニ小成ニ安ンズル者

ハ。他無シ。或時ハ高遠ナル志ヲ起スアリト雖。久シク之
ヲ保持セザルニ坐スルノミ。其心ニ放テ。大ニ欲スル所ノ
者ヲツテ存スレバ。何ゾ區々タル利益ト。快樂トニ拘泥ス
ルニ暇マアランヤ。而シテ其志ヲ保持スルニ就テハ。其眼
ニ遮リ。其耳ニ觸ル。所ノ者ヲ取テ。以テ之ヲ培養シ。之ヲ
長大ニスルノ工夫ヲ爲サザル可カラズ。本篇ニ列叙スル
所ノ者ハ。則チ前哲先輩ノ志ヲ立テ。之ヲ保持セシ所ノ
事蹟ニシテ。人世事業ノ基礎ヲシテ。牢固ナラシメザル可
カラザルヲ證明スルニ足ル者タリ。冀クハ今世ノ人士ガ。
志ヲ移動シ易キノ痼病ヲ療スルノ藥石ト爲リ。後進ノ輩
ガ。其志ヲ培養スルノ肥糞ト爲ランヲ。第一ノ源義家兵法ヲ學ビシ事

源義家ハ、伊豫守頼義ノ長子ナリ。幼名源太。八幡太郎ト稱
ス。人ト爲リ勇決英果ニシテ。騎射神ノ如シ。頼義ニ從テ安
倍貞任ヲ陸奥ニ擊テ之ヲ誅ス。康平六年。功ヲ以テ從五位
下ニ叙シ。出羽守ニ任ズ。嘗テ京師ニ在リ。關白頼通ノ第ヲ
過ギ。陸奥ノ戰爭ヲ談ズ。博士大江匡房。別室ニ在リ。之ヲ聞
テ曰ク。好男子。惜クハ未ダ兵法ヲ知ラズ。從者微カニ其語
ヲ聞キ。恨テ義家ニ語ル。義家曰ク。其或ハ然ラント。匡房ノ
出ルヲ見。其車ニ就テ之ヲ拜ス。遂ニ就テ學ブ。永保三年。陸
奥守ニ任ジ。鎮守府將軍ヲ兼ス。時ニ藤原家衡。藤原清衡ト。
清原真衡ト。兵ヲ構フ。義家急ニ任國ニ赴キ。真衡ヲ助ケ。家
衡ヲ出羽ニ攻メテ利アラズ。家衡ノ叔父武衡モ亦家衡ニ
應テ。兵ヲ合セテ金澤ノ柵ニ據ル。寛治元年。義家自ラ數萬

騎ヲ率テ之ヲ攻ム。柵ヲ距ツル數里。鴻雁ハ行ヲ亂ルヲ望
ミ。見テ曰ク。是レ必ス伏アルナリト。之ヲ搜ム。レバ果シテ
然カリ。衆兵謂テ曰ク。兵法ニ言フ。鳥亂ル者ハ伏ナリト。
我レ學バザレバ。則チ殆シ。弟義光ノ京師ヨリ來ルニ會ス。
義家大ニ悦ビ。カヲ戮ハセ。柵ヲ攻メテ之ヲ屠ル。陸奥出羽
悉ク平グ。義家父祖ノ業ヲ兼ケ。善ク將士ヲ撫ス。其陸奥ヲ
征スル前後十二年。東國ノ民皆其恩威ニ服シ。稱シテ八幡
公ト曰フ。
櫻所子曰ク。義家朝臣ノ兵法ヲ江帥ニ問ヒ。雁行ノ亂ル。
ヲ見テ伏アルヲ知リタル事實ノ如キハ。固ヨリ人口ニ贈
スル所ニシテ。喋々論評スルヲ須キズ。然リト雖。臣閉目
沈思シテ。當時ノ光景ヲ追憶セバ。義家結髮シテ東征シ。櫛

風沐雨。九年ノ戰鬪ヲ經テ遂ニ凱旋シ。一日菟道ノ關白ノ
前ニ於テ。戰功ヲ説ク。從卒博士ノ言ヲ聞キ。劍ヲ按シテ其
多ロヲ憤ル。亦宜ナリ。然ルニ義家敢テ忿ラザルノミナラ
ズ。其鈴轡ニ遼キヲ知ルヲ以テ。車下ニ磬折ス。夫レ江帥ハ
三朝ノ侍讀トシテ。從三條天皇ノ即位ニ及ビ。荐リニ擢
政ヲ革メ。治ヲ延喜ノ隆時ニ比スルニ至リシモノ。與カッ
テカアリト稱ス。然レバ則チ江帥ノ誨ユル所。帝ニ風雲正
奇ヲ極ムルノミナラズシテ。義家ノ材。亦固ヨリ徒ニ父ノ
書ヲ讀ムノ類ニ非ズ。應サニ學ブ所。伏ヲ察ルヨリ大ナル
者アルヤ。疑ヒヲ容レザルナリ。而シテ其雁行ノ亂ル。ヲ
見テ。伏ヲ知リシガ如キハ。固ヨリ偶然ナルノミ。且ツ夫レ
義家十有二年ノ征役ニ從事シ。八州ノ精銳其指麾ニ從フ

地步ヲ占ムルモ。位正四位下ニ過キズ。官鎮守府將軍左衛
門督タルニ過ギズト雖。少クモ不滿ノ色無キモノ。豈ニ
耐忍ノ力。他ノ武勲アル人々ニ超過スル者ニ非ズヤ。而シ
テ其基業裔孫ニ及ビ。霸府ヲ鍊倉ニ開クニ至リシ者。亦此
耐忍ノ餘慶ト謂フベシ。功高フシテ官ノ卑キヲモ。敢テ憤
鬱ヲ懷カザルノ氣象ハ。江帥ノ好男子。未ダ兵法ヲ知ラズ
ト云ヒシヲ從者ニ聞クモ。敢テ怒ラズ。其出ルヲ見テ車
下ニ磬折スル事ニ於テ之ヲ見ルニ足レリ。嗚呼。英武義家
ノ如クニシテ。耐忍義家ノ如クナル。子孫必ズ興ル者アラ
ントノ遺言。果シテ空シカラザリシモノ。亦故アルナリ。今
ヤ開明ノ隆運ニ屬シ。知識ヲ殊邦異域ニ求メラル。然ルモ
猶ホ世ノ人士。事務家ト理論家ト。互ヒニ相嘲ケリ。即チ事

ト、長袖交横ハリ、其宛轉ノ妙ヲ極ム。少將凝視スル者久シ。因テ大ニ號泣ス。左右恠ムデ、其故ヲ問フ。少將乃チ曰ク、渠裙釵ノ流ト雖氏既ニ天下第一ノ名ヲ成ス、我ハ則チ堂々タル一丈夫ニシテ曾テ海内一人ト稱セラル、ヲ得ズ豈能ク羞テ泣カザランヤト。櫻所子曰ク、大丈夫ノ志ヲ立ル、所謂聖人君子、英雄豪傑ノ言行ヲ聞クヲ以テノミナラズ、其耳目ニ感觸スル所皆以テ其志氣ヲ激勵スルニ足ル。少將ノ豪邁ナル、上杉景勝カ天下ノ勁敵ト稱スルモ、自ラ一人ヲ以テ之ニ當ラン、ヲ請ヒ誓テ白川ノ關ヲ越ユル一步ナラシメズ、然リト雖氏當時勇武老鍊、其人ニ乏シカラズ、少將未タ海内一人ノ聲譽ヲ得ハ能ハス、是レ一舞妓ヲ觀ル、亦以テ其豪壯ノ氣ヲ

激發スル所以ナリ。古ヘニ曰ク、君子ハ義ニ喻トリ、小人ハ利ニ喻トリト。少將ノ如キ、武夫ハ則チ勇ニ喻トリト。詔ノベキナリ。今世俳優講談師等ノ如キ、天下第一ノ名ヲ擡スル者アリ、學術技藝ヲ講究スル人、其技ヲ見、其名ヲ聞キ、羞チ且ツ泣テ發憤激勵スルアラバ、必ズ功名ヲ成スノ日アルベシ。宜ク其好ム所ニ就テ、喻トリ所アルベキナリ。何ゾ必ズシモ小人君子武夫ノ利ト義ト勇トニ喻ルアルノミナランヤ。

第三 中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事

中江藤樹、小字ハ與右衛門、其祖ハ加藤侯ノ臣ニシテ、其父ハ農一隱ル。祖ニ先テ没ス、祖乃チ藤樹ヲ拉シテ、伊豫ノ大洲ニ之ク、藤樹童巾ニシテ老成ノ如シ。年甫メテ十一、一日

大學ヲ讀ミ、天子ヨリ以テ庶人ニ至ル。壹ニ是ハ皆ナ、身ヲ
修ムルヲ以テ本ト爲スト云ニ至リ、嘆息シテ曰ク、幸ニ此
經ノ今ニ存スル聖人豈ニ學ムデ至ル可カラザル者ナラ
ンヤト、年十七、京師ノ僧來テ論語ヲ講ズ、是時ニ當リ大洲
ノ俗、惟武弁是レ競ヒ、敢テ從學スル者無シ、獨リ藤樹日夕
往テ聽ク、僧居ルノ僅カニ月餘ニシテ去ル、因テ四書大全
ヲ得テ之ヲ讀ム、而シテ往々僚友ノ爲メニ毀謗セラル、是
ニ於テ晝ハ則テ深ク之ヲ藏メ、夜ニ至テ始メテ卷ヲ開ク、
藤樹躬行ヲ先ニシ、文詞ヲ後ニシ、毎ニ四民ヲ引テ之ヲ訓
誨ス、人皆愚ト無ク、皆其德ニ服シテ善ニ興起セザルハ無
シ、爲學修行ヲ以テ聲名海内ニ施ク、大洲ヲ去テ近江ニ來
リ、母ヲ養フニ及ビ、公侯辟召シ、玉帛禮ヲ具シテ之ヲ聘ス

レ、峻拒シテ應ゼズ、鄉黨里閭皆ナ其德ニ薰ジ、商賈ト雖
正得ルヲ見テ義ヲ思ヒ、旅舍茗肆ノ若キ、客遺ル、所ノ物
アレバ、則チ必ズ之ヲ閣上ニ置キ、以テ遺者ノ復タ來ルヲ
俟ツ、年ヲ歷ルノ後チ、塵土全滿スルニ至ル、煙管煙包ノ類
ト雖、正、竟ニ収用セズ、其此ノ如クナルヲ以テ、鄉閭舉ゲテ
藤樹ヲ尊稱シテ聖人ト爲ス、其聖人豈ニ學ムデ至ル可カ
ラザル者ナランヤノ言、果シテ驗アリ、

某州ノ一士人、藤樹ノ故里ヲ經過シ、其墳塋ヲ弔セント欲
ス、路ヲ農夫ニ問フ、農夫即チ耒耜ヲ舍テ、徑チニ趨テ屋ニ
入リ、更メテ潔服ヲ著ケテ出ヅ、士之ニ跟シテ行ク、既ニシ
テ墓前ニ至ル、農夫拜掃甚ダ恭シ、士心ニ之ヲ訝カル、因テ
問テ曰ク、爾等藤樹ニ於ケル何ノ親故アリテ、敬禮乃チ爾

ルヤト。農夫曰ク、藤樹先生ヲ欽仰スル。豈ニ惟余ノミナリ
ンヤ。閩邑皆然カリ。父老毎ニ其子弟ニ語テ曰ク、吾里父子
禮アリ、兄弟恩アリ、室ニ忿疾ノ聲無ク、面ニ和煦ノ色アル
者、職トシテ藤樹先生ノ遺教ニ由ルナリ。此ハ一人トシテ
其恩ヲ戴カザル無キ所以ナリト。是ニ於テ士客チヲ變ジ
テ曰ク、世稱シテ近江聖人ト爲ス。吾乃チ今ニシテ其遺蹟
ニ非ルヲ知ルナリト。即チ其墓ヲ敬拜シ、厚ク農夫ニ謝シ
テ去ル。又藤樹ト同里ノ人、江戸ニ於テ某家ヲ嗣グ。一日客
アリ。語次儒ニ及ブ。客問テ曰ク、中江藤樹ハ予ノ里人ナリ。
聞ク其學世ノ仰グ所トナルト。予必ズ其行誼ヲ詳カニセ
ン。請フ吾ガ爲ニ語レト。其人客チヲ改メテ曰ク、藤樹先生
ハ吾ガ先子ノ師事スル所ナリ。因テ其平生ヲ悉クセリ。實

ニ近江聖人ノ名ニ非カズ。我レ出デ、此家ノ後タルニ及
ビ、先子其什護スル所。先生ノ墨蹟一張ヲ將テ我ニ付シ。且
ツ戒勅シテ曰ク、此ハ是レ聖人ノ手澤兒善ク之ヲ藏メ知
ラザルモノヲシテ汚サシムルヲ勿レト。今吾子先生ヲ慕
ハバ、則チ之ヲ觀ルヲ得セシメント乃チ起テ禮服ヲ更
メ着ケ一軸ヲ櫃ヨリ出シ捧ゲテ案頭ニ置キ頂禮跪拜ス
ル猶ホ細徒ノ佛像ヲ崇ムルガゴトシ。客始メテ敬ヲ起シ
以爲ク、藤樹ハ畎畝ノ一匹夫ナリ。而シテ士大夫ノ間ニ重
ンゼラル。此ノ如クナレバ、則チ其道德世ノ所謂儒者
ト通カニ同ジカラズ。豈ニ禮セザルヲ得ンヤト。鹽泉再
拜。後チ之ヲ觀タリシトイフ。

櫻所子曰ク、藤樹ノ篤行力學ヲ以テ、近江聖人ノ名ヲ得其

墳墓及ビ墨蹟ニ至ルマデ、崇敬セラル、者、其初メ大學ヲ
讀ミ、天子ヨリ以テ庶人ニ至ル。壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以
テ本ト爲スノ語ニ至リ、聖人豈ニ學ムデ至ルベカラザル
者ナランヤト感悟シ、志ヲ勵マシテ修鍊セシニ由レリ。思
フニ元和觀索以來、主運漸ク旺シニシテ、學問文章、以テ一
世ニ泰斗タル者、其人多シ。而シテ篤行ヲ以テ稱セラル、
者、獨リ翁ト仁齋伊藤氏アルノミ。然ルニ翁ノ門、熊澤蕃山
ノ如キ俊傑ヲ出スヲ以テ視レバ、其決シテ謹直ナル一漢
學老爺ニ非ズシテ、必ズ經世濟民ノ學術アリシヲ知ルベ
シ。唯、其躬行ヲ先トシ、貧賤ニ素シテ貧賤ヲ行ヒ、敢テ放言
高談、以テ人ノ耳目ヲ駭カスカ如キヲ爲サザルノミ。吁、
孟子ノ所謂人ノ目ヲ駭カスカ如キヲ爲サザルノミ。語ハ決シテ言

フベクシテ行フベカラズトセンカ、恐クハ行フベカラザ
ルニ非ズ。行ハザルノミ。然レバ則チ舜タリ跖タル唯、其人
ノ初志如何ニ在リ、且夫レ藤樹ハ、家貧フシテ、論語ノ講ヲ
聽ク月餘ニシテ、後チニ四書大全一部ヲ以テ師トセシモ、
遂ニ其躬行心得彼レガ如キニ至ル。今ノ書生、内地ノ人ハ
從テ學ブニ足ラズトシ、往々碧眼ノ歐客ヲ師トシ、若クハ
英京佛都ニ多年留學シ、一ノ得ル所無キ者ノ如キ。若シ翁
ヲシテ之ヲ見セシメバ、或ハ當サニ驚死スベシ。

第四 長沼宗敬、濤齋ト號ス。信濃松本ノ人、長沼五郎宗政ノ裔ナリ。

長沼宗敬、濤齋ト號ス。信濃松本ノ人、長沼五郎宗政ノ裔ナ
リ。濤齋四歳ニシテ父ヲ喪ヒ、丹波守戸田侯ニ明石ニ從ヒ、
又侯ニ從テ加納ニ移ル。年十五ニシテ仕ヘテ近習トナル。

祿百石、十六歳ニシテ上疏シテ事ヲ言フ、後チ又讜言ヲ進
ムルモノ數卒ニ合ハズシテ去リ、江戸ニ赴キ、又筑後、國
主有馬侯ニ仕ヘ、二百五十石ヲ食ム、寛文八年、祿ヲ辭シテ
復タ仕ヘス、初ハ澹齋ハ加納ニ在ルヤ、僧寺ニ遊ビ、字ヲ習
ス、旁兒ハ小學ヲ讀ムヲ聞キ、輒チ能ク之ヲ記ス、僧爲ハ
其文ヲ摘ムデ講解ス、澹齋大ニ悦ビ、是ヨリ志ヲ儒典ニ傾
ケ、篤ク洛闢ハ説ヲ信ジ、持敬ヲ以テ主ト爲シ、聖賢ヲ以テ
必ズ及ブ可シト爲シ、經術ヲ精研シ、旁ラ甲州ハ兵法ヲ學
ブ、既ニシテ曰ク、世傳フル所武田氏ハ兵法ナル者、多クハ
小幡景憲輩ガ割裂彌縫スル所ニシテ、當時ハ信傳ニ非ル
一リ、吾武門ハ繙トシテ以テ正サバル可カラズト、是ニ於
テ古今ハ難鈴ハ鑽極シ、身戎陣ヲ經ル者アルヲ聞ク、必ズ

往テ之ヲ質ス、銃馬曲藝、築城ハ制ニ至ルマデ、窮究セザル
ナシ、諸レヲ三代師律ノ意ニ原シ、諸レヲ孫吳七子ニ參シ、
下モ明將俞戚ノ法ニ習シ、時宜ヲ量カリ、實効ヲ驗シ、網羅
參伍シ、明辨精邁シテ、兵要錄二十二卷ヲ著ハシ、以テ一家
言ヲ建ツ、其大要ハ射、取、刀、槍、之ヲ本邦ニ原シ、節制、紀律、之
ヲ漢土ニ取リ、大小火器ノ法則ハ西洋ヲ參用ス、嘗テ門生
ニ語テ曰ク、吾錄三分ハ書ナリ、二分ハ口訣ニ在リ、五分ハ
則チ學者ノ自得ニ在ル、後來善ク之ヲ用ユル者ノル
必ズ我法ヲ株守ス可カラザルナリト、其最モ深ク悟ル所
者ハ、風台ガ握奇、武侯ガ八陣ナリ、握奇ハ陣集解ヲ述ヘ
以テ公孫弘、獨孤及輩ノ失ヲ糾シ、李靖、趙本學等ノ未ダ備
ハラザル所ヲ補フ、一時聲譽海内ニ高シ、諸侯爭ヒ請フテ

師ト爲ス。然レ氏澹齋兵家ヲ以テ自ラ名トスルヲ欲セデ
又侯門ニ奔馳スルヲ喜バズ。其請ニ應スルニ三家ヲ以テ
限リト爲ス。先ヅ儒經ヲ説キ。然ル後ヲ武ニ及ブ。備前以將
光政其著書ヲ看ルヲ請フ。乃チ出師篇ヲ抽テ呈覽ス。少將
深ク之ヲ嘉シ。歎ジテ曰ク。予ガ齒尚ホ壯ナラシメバ。將
サニ斯人ニ從テ遊バントス。今老テ及ガナシト。乃チ其臣
日置伊右衛門ヲシテ從學セシム。明石ノ城主松平若狹守
直明客禮ヲ以テ之ヲ延キ。班ヲ擢老ニ列シ。政務ヲ與カリ
間カシム。居ル五年。去テ山城伏見ニ隱ル。元祿三年五十六
ニシテ歿ス。其門ニ學ブ者。後先數百十人。其尤モ著ハル
者。佐枝尹重。宮川尚古。二人ノ學。分レテ兩派トナル。長沼流
ハ兵學ト稱シテ。久シク世ニ行ハレシ者。即チ澹齋ヲ祖述

スル者ナリトナフ
櫻所ヲ曰ク。澹齋ノ生ル。隼素ノ後ニ在ルヲ以テ。人或ハ
其書ヲ敗シ。ルヒノ空談ト爲スト雖。氏江帥ノ門下ニ義家
アリ。趙本學ノ弟子ニ俞大猷アリ。學ノ以テ已ム可カラザ
ル。此ノ如シ。今ヤ歐洲ト交通セシヨリ。兵家ノ法制一變
ス。雖。氏澹齋ノ學。傳テ徳川氏ノ季世ニ及ブマデ。大ニ世
ニ行ハル。者。亦其篤志力學。凡常ナラザルヲ見ルニ足レ
リ。
・第五 熊澤了介學ニ志シ。良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成ス
ニ至リシ事
熊澤了介。名ハ伯繼。小字ハ治郎八。後チ助右衛門ト改ム。藩
山ノ號ス。父ヲ野尻藤兵衛一利ト曰フ。一利初メ如藤嘉明

仕、後チ官ヲ罷メテ京都ニ寓ス。熊澤氏ヲ娶リ、元和五
年コ以テ了ハテ平安五條ニ生ム。外祖守久、養テ嗣ト爲ス。
因テ熊澤氏ヲ冒カス。寛永十一年、了介歳甫メテ十六、京都
ノ所司代板倉候備前候少將光政ニ囑シテ之ヲ舉ゲ、備前
縣春選ヲ加フ。偶、島原ノ賊起ル候幕府ノ命ヲ奉ジ、江戸ヨ
リ歸リ、兵ヲ治メ以テ應援ニ備。是時了介年十八、猶亦年
少ナルヲ以テ東郷ニ留ル、乃チ請ハズシテ岡山ニ歸ル。軍
律ヲ平カスヲ以テ罪ヲ獲タリ。了介歳二十、自ラ以爲ク公
事、監キテ罪シ、寧處ニ違テラズ。何ゾ以テ支武ヲ講習スル
ヲ得ン。此ハ若クニシテ身ヲ終フル固ヨリ吾志ニ非ルナ
リ。今ヤ暫シ將甘ニ俸禄ヲ増賜スルノ命ヲラントス。然ル
カバトクンバ則チ如何ゾ命ヲ拒ムヲ得ンヤト。遂ニ近江

ノ桐原ニ遷シ、歳餘始メテ四書ヲ讀ミ、宋註ニ據テ其義
ヲ研窮ス。又京ニ赴テ良師ヲ求ム。未ダ其人ヲ得ズ。其
ニ病ヲ投ズル者一人、語テ曰ク、往日余主ノ爲メニ遠
ク、時金二百兩ヲ懐一ス、即チ主ノ齋ラセシムル所ナリ。途
ニシテ驛馬ニ跨リ、金ヲ出シ、一撃ス。日暮之ヲ収ム
ルヲ忘レテ宿シ、困頓シテ枕ニ就ク。半夜初メテ覺ム、乃
チ金ヲ遺ルヲ覺トル。則チ茫然トシテ、猶ホ疑フテ、夢
ト爲ス。既ニシテ神乃チ定リ、痛心疾首、千思萬慮スレドモ
之ヲ求ムルニ術無ク、一ニ死ヲ雖經ニ決ス。戚然トシテ、自
ラ天ノ弔恤スル所トナラズシテ、此悲涼ニ逢フヲ歎ズ。時
ニ淵源ノ聲甚ダ急ナルヲ聞ク。之ヲ問ハバ、則チ稱ス。馬
其ナリト。因テ亟カニ出ツ。渠レ即チ金ヲ出シテ曰ク、小子

家ニ歸テ將サニ馬ヲ洗ハントス、鞍ヲ解クニ又シテ之ニ
得タリ、是レ君ノ遺ル、所ナリ、故ニ來テ還呈スト、封宛キ
「故ノ如シ、吾驚喜措ク所ヲ知ラス、腰纏別ニ十六兩アリ、
即チ解テ以テ之ヲ謝ス、馬夫受ケズシテ曰ク、君ノ物君ニ
付ス、奚ノ謝カ之レアラシヤ、然レ氏夜ヲ冒シテ來ル、此實
二百文ヲ得、バ足レリト、吾曰ク、尊ヒ自ラ作ク、汝ガ終義
ハ心ナクンバ、吾生ヲ得ル、地無シ、所謂死ニ生カシテ骨
一肉スルナリ、不^レ腴、黃物^レ敢テ報ト云ニハ非ス、斯カ以テ
寸心ヲ表ス、馬夫愈辭ス、乃チハ兩ヲ減ズ、亦受ケズ、稍々
減ジテ纔カニ一兩金ニ至ル、馬夫執ル、益確シ、曰ク、君我
ヲ瀕ル、ナカレ、予守ハ所^レハ、ハナリト、吾蒙ジテ問テ曰
ク、欲ニ淡キ者、今ノ世多ク見ズ、其義ヲ以テ利ト爲ス、汝ガ

カ如キニ至テハ、則チ絶テ得ベカラズ、所謂守ル所ノ者、
ハ何ゾヤト、曰ク、賤役^レ口ヲ飼ス、豈ニ利ヲ思ハサシヤ、勿
シテ中江與右衛門、藤樹^一云者アリ、里中ニ教授ス、嘗
テ其言ヲ聞クニ、曰ク、誠正^一以テ其身ヲ修メ、君ニ事フルニ
忠ヲ致シ、親ニ事フルニ孝ヲ盡シ、貧ヲ以テ濫ルナカレ、賤
ヲ以テ枉ルナカレ、今若シ賜フ所ヲ以テ之ヲ利トセバ、
則チ此心ヲ欺クナリト、言畢テ去ル、噫、澆季ノ世安シ、此
ハ一鄉ノ鄙人ノ素^一道ノ何物タルヲ識ラズ、利ニ趨ル
ヲ驚レカ若シ、何ノ義カ之ヲ思ハシヤ、而シテ其廉潔古ノ君
子ニ愧ハル者、必ズ教育ノ致ス所ナリ、所謂中江與右衛門
必ハ此者、其德^一上ニ想ヒ見ル可キナリ、今ノ世一方^一此地

人ヲ捨テ、誰ニカ適從セヨト。是日即チ束装シ往テ謁シ、業ヲ明一受ケシト。又請フ、藤樹辭スルニ、人ハ師トナルハ足ラザルヲ以テス、予介益請フテ置カズ。二夜其無下ニ寢タリ。藤樹ノ母之ヲ見、藤樹ニ謂テ曰ク、人遠方ヨリ來ル懇請此ノ如シ、之ニ習テ所ヲ傳フルモ誰カ好ムテ人ノ師爲ルト謂ハンヤト。是ニ放テ始メテ接客ス。時ニ寛永十九年、了介年二十四ナリ。明年一利江戸ニ適キ仕ヲ求ム。了介ハ則チ弟妹八人ト留リテ共ニ母ニ事フ。家甚ダ貧シ、毎ニ米ハ秬糠ヲ粥ト爲シテ之ヲ食ラヒ。冬ニ方テハ紙襖ヲ以テ寒ヲ禦グ。刻苦スルニ茲ニ三四年、人或ハ之一勸ハルハ仕官ヲ以テシ。謂テ曰ク、子ガ家數口アリ、恐クハ將ケニ飢ニ及バントス。了介肯シヒス。正保二年、了介年二十七。

學識愈高シ、備前侯素ヨリ其才ノ凡常ナラザルヲ知リ、欽慕シテ止マズ。京極侯ヲ煩ハシテ旨ヲ諷シ、以テ了介ヲ聘ス。是ニ放テ了介復岡山ニ來ル。了介ノ岡山ヲ去ル凡ソ八年ニシテ還ル。居ルヲ二歳候了介ヲ以テ大隊ニ充テ、三百石ヲ給ス。同僚皆了介ニ矜式ス。後チ擢デ、騎隊帥ト爲シ、藩政ヲ與カリ聞カシム。祿三千石ヲ増賜ス。是ニ放テ了介乃チ侯ニ告ゲ、一年食ハ所ノ邑入ニ三倍シ、以テ之ヲ貸サレントヲ請フ。蓋シ其秋祿ノ當サニ藏スベキ所ノ兵器ヲ具ヘント欲スルナリ。侯之ヲ許ス。後チ幾クモ無ク償還ス。了介侯ニ謂テ曰ク、藩制四疆ノ要害處分、騎隊帥以テ之ヲ保チ、大隊ノ士二十人之ニ屬セシメント、備作播ノ境界、大牙相接ス。侯乃チ了介ヲ以テ之ニ當ツ。了介曰ク、某聞ク治

ニ處テ亂ヲ忘レス。古ヘハ士咸ナ私邑ニ在リ武備焉ヨリ
善キハナシ。然レバ則チ法令遠カニ復シ難シ。某請フ先
之ヲ効シ。以テ緩急ニ備ハント。侯之ヲ可トス。是ニ於テ國
士若下ヲ簡ビ。匹馬單槍以テ諸レヲ便宜ノ地ニ處ク。是歲
了介年三十二。慶安三年。侯ノ述職ニ扈シテ江戸ニ適キ。騎
隊帥ヲ以テ宰臣ノ事ヲ攝行ス。名聲籍甚ニシテ。信服スル
者多シ。紀例。侯幕府ハ宗室ヲ以テ了介ヲ敬禮スル。送迎必
ズ門ニ及フ。松平伊豆守久世大和守板倉内膳止。堀田筑前
守。淺野因幡守。中川山城守。水野周防守。木多下野守。松平日
向守等。諸侯其他名門右族。爭テ之ヲ延ク。將軍家光公。了
介ノ學識アルヲ聞キ。將サニ召見セントス。尋デ薨去ヒラ
レシヲ以テ果サス。後チ侯ノ江戸ニ述職スルヤ。或ハ扈シ

或ハ留マル。兼應三年。備前洪水アリ。明暦元年。大ニ饑。封
内ノ民死スル者九萬人ト云フ。侯大ニ之ヲ憂ヒ。乃チ諸老
臣ニ屬シテ謀議セシム。衆論決セズ。了介曰ク。緩議日ヲ移
サバ。恐クハ饑莩塗ニ載スルヲ致サント。是ニ於テ大ニ府
庫ヲ開キ。以テ困窮ヲ賑ハス。然レ氏奉行若。或ハ遲緩旨ニ
違フヲ以テ了介乃チ自ラ巡按シ。德施疆内ニ普ネシ。民因
テ蘇息ス。是ヨリ先キ岡山城東西ノ村落。毎ニ盛暑ニ方リ。
水ノ涸ルニ困ム。了介曰ク。是諸山密樹繁陰ノ大氣ヲ蓄
ヒ。雲雨ヲ醸ス。無キヲ以テノ故ナリト。是ニ於テ田賦ヲ照
料シ。壯丁ヲ調發シ。松數千株ヲ泰山ニ樹ユ。培養法ヲ得。歲
ヲ逐テ繁殖ス。是ヨリ九夏雨多クシテ。近村未ダ嘗テ旱魃
ノ患ヲラス。又令ヲ下ダシテ。川ノ兩邊ノ山木ヲ伐ルコ禁

ズ。曰ク山不毛ナレバ。則チ雨水保タズ。直チニ土。磧ヲ流ガシ。川。隨テ淺シト。凡ソ。封内。池ヲ穿チ。隄ヲ築キ。溝渠ヲ開キ。漕運ヲ便ニスル等ハ。事。概ネ。馬上之ヲ望ミ。利害ヲ較量ス。數十年ノ後チ。其言皆中々ラザルナシト云フ。

了介ノ西歸スルニ及ビ。往テ板倉候ニ謁ス。侯曰ク。子ハ明主ニ仕ヘ。言聽カレ。計從ハル。吾徐ロニ之ヲ籌カルニ。子其終リヲ善セント欲セバ。則チ早ク致仕シテ。田里ニ屏處セヨ。今ヨリ後々復タ世事ヲ言フ勿レ。此レ功成リ身退クノ義ナリト。了介拜謝シテ去ル。然レ氏眷遇ノ渥キ。俄カニ骸骨ヲ乞フヲ得ス。加フルニ濟世ハ志自ラ已ム。能ハザルヲ以テス。且ツ命ヲ奉ジテ復タ江戸ニ赴ク。是時既ニ事ヲ共ニスル者ト隙アリ。了介亦自ラ安ンセス。明曆二年侯木谷

ニ狩ス。了介躓シテ崖ヨリ墜テ。手足ヲ傷ク。是ニ由テ致仕ヲ乞フ。和氣郡寺口ハ。其食邑ナルヲ以テ。此ニト居シ。蕃山ト號ス。蓋シ新古今集ニ載スル。源重之ノ歌ニ筑波山ハ。やまあげやまあげれど。なみいふ。なみいさ。そりねり。なみト。王陽明ガ立志ハ。說此歌ハ。意ニ符ス。而シテあげやまハ。蕃山ナリ。故ニ以テ號ト爲スト云フ。

了介既ニ嘉遯ノ志アリ。侯微カニ其情ヲ知ルト雖。氏。然カモ強テ止ムベカラズ。又意之ヲ留メント欲ス。是ニ於テ公子政興ヲシテ。其祿ヲ襲ハシメ。後ト爲ス者ノ如シ。是歲萬治元年。了介年四十。遂ニ疾ヒテ以テ骸骨ヲ乞ヒ。去テ京師ニ寓ス。而シテ一條右府。中院大納言。清水谷大納言。油小路大納言。中御門中納言。野々宮黃門。押小路參議。伏原參議等。

其他貴紳其學ヲ慕ヒ、束脩ヲ行テ來學シ、佩玉、鐙、車馬門
ニ滿ツ。聲華一世ヲ蓋フ。居ルノ之ニ頃クス。或人丁介ヲ所
司代牧野侯ニ諧ス。牧野侯之ヲ信ジ。了介ヲ忌ム。寛文七年
ノ春、遂ニ行テ大和ノ芳野ニ隱ル。然而メ又去テ、廬ヲ山城
ノ鹿背山ニ結ブ。客アリ問フテ曰ク、先生頃者間アリヤ否
ヤト。曰ク、吾善ヲ爲ス。惟レ日足ラズ。何ノ閑暇カ之レアハ
ント。客曰ク、今日善ヲ爲スモ其跡何ニ由テカ見ハレンヤ
ト。了介毅然トシテ曰ク、人苟モ志ヲ義ニ立ツレバ。則チ鹽
嗽、櫛、繼モ皆善ニ進ム。地タリ。若シ然ラズンバ。一タビ九
合ヲ匡スモ。亦復兒戲土羹ノミト。客曰ク、善哉ト。他日又問
フ。先生何ノ樂ム所ゾト。了介曰ク、獨リ樂地ノ名教ニ在ル
ノミ。知ラズ。蘿月松風モ亦自ラ天心ヲ見ルト。寛文九年。酒

井雅樂頭板倉内膳正ニ候旨ノ傳ヘ。了介ヲシテ播磨明石
ニ徙ラシム。時ニ松平日向守明石ニ守タリ。因テ太山寺ノ
傍ニ居ラシム。弟子益進ム。門人嘗テ問フテ曰ク、夫子未ダ
嘗テ憂ヘリルカ。何為レゾ窮ニ處スル申々如ナルヤ。夫子
未ダ嘗テ懼レザルカ。何為レゾ厄ニ遭フテ裕々如ナルヤ
ト。了介曰ク、是レアルナ。譬使仁者ニシテ必ス達々ハ。閔
損仕ヲ泣ヒニ辭セズ。勇者ニシテ必ス遂ゲバ。仲由、饒、臺
下ニ結バズ。了介時ニ東ズレバ。千束ノ賦ヲ題ス。時否リ
バ。身ヲ一畝ノ宮ニ束カヌ。否泰ハ運ナリ。禍福ハ天ナリ。天
レ又何ヲカ憂ヘ。何ヲカ懼レ。吾ハ則チ以テ之ヲ大ノ寵
靈ト謂フ。古人罪無クシ。天月ヲ謫居ニ弄スルヲ願フ者。吾
適月ニ東ジテ。中庭ニ彷徨ス。幽情遠概。亦人界ニ似テ。富貴

ヲ。藉。テ。世。ニ。薰。灼。ス。ル。ハ。心。誠。ニ。罪。アル。ヲ。知。ル。豈。ニ。愧。
チ。サ。ラ。ン。ヤ。吾。内。ニ。省。ミ。テ。疚。シ。カ。ラ。ス。人。言。何。ソ。恤。フル。ニ。
足。ラ。ン。ヤ。今。誤。テ。嫌。諱。ニ。觸。ル。ト。雖。氏。世。人。マ。タ。罪。名。ヲ。定。
メ。タ。ル。ニ。非。ル。ナ。リ。百。年。ノ。後。チ。必。ス。公。論。ア。ラ。ン。唯。是。間。居。
無。事。歌。講。誦。竊。カ。ニ。先。王。ノ。道。ヲ。樂。ム。デ。老。將。升。ニ。至。ラ。
ン。ト。ス。ル。ヲ。知。ラ。ザ。ル。ノ。ミ。ト。延。寶。十。年。明。石。侯。封。ヲ。人。和。
郡。山。ニ。移。ス。了。介。亦。此。ニ。遷。ル。幾。ク。モ。無。ク。復。封。ヲ。古。河。ニ。移。
ス。本。多。下。野。守。之。ニ。代。ル。了。介。ヲ。待。ツ。一。ニ。松。平。日。向。守。ノ。時。
ニ。准。ズ。年。子。遠。方。ヨ。リ。至。テ。業。ヲ。受。ク。ル。者。多。シ。其。名。海。内。ニ。
噴。々。タ。リ。貞。享。四。年。將。軍。綱。吉。公。ノ。命。ヲ。以。テ。了。介。又。古。河。ニ。
徙。ル。松。平。日。向。守。之。ヲ。待。ツ。愈。厚。シ。其。歲。ノ。十。月。封。事。ヲ。幕。府。
ニ。上。ツ。リ。政。務。ヲ。更。始。ス。ル。ヲ。勸。ム。大。ニ。旨。ニ。忤。ヒ。古。河。ニ。禁。

錮。セ。ラ。ル。了。介。既。ニ。時。二。用。ナ。ラ。ル。ヲ。得。ズ。喟。然。ト。シ。テ。歎。
ジ。テ。曰。ク。吾。道。行。ハ。レ。ズ。何。ヲ。以。テ。力。自。ラ。後。世。ニ。見。ハ。レ。ン。
ヤ。ト。乃。チ。大。ニ。志。ヲ。著。述。ニ。專。ラ。ニ。ス。其。學。經。濟。ニ。長。ズ。論。ハ。
ル。所。皆。獨。得。ノ。見。ナ。リ。

了。介。資。性。溫。良。寬。弘。ニ。シ。テ。家。人。奴。婢。ト。雖。氏。相。親。ム。猶。ホ。骨。
肉。ノ。ゴ。ト。シ。菜。羹。鮓。炙。ト。雖。氏。來。テ。飲。食。ス。ル。者。各。飽。ヲ。獲。テ。
去。ル。家。法。最。モ。儉。素。ニ。シ。テ。妻。子。夙。務。ヲ。幹。旋。ス。閨。牖。猜。惟。ハ。
聞。エ。外。ニ。發。ハ。レ。ズ。衣。服。飲。食。泊。然。ト。シ。テ。營。ム。ト。ナ。シ。晚。年。
最。モ。音。樂。ヲ。好。ミ。音。律。ヲ。精。熟。シ。雅。樂。解。ヲ。著。シ。之。ヲ。第。子。ニ。
授。ク。世。知。ル。者。或。ハ。希。ナ。リ。元。祿。四。年。ノ。秋。了。介。年。七。十。三。ニ。
シ。テ。歿。ス。其。墓。ニ。展。入。ル。者。今。ニ。至。テ。絶。ヘ。ズ。ト。云。フ。
了。介。年。少。時。體。貌。尠。肥。セ。リ。自。ラ。以。爲。ク。武。人。ノ。職。一。旦。緩。

急、甲ヲ被ムリ、兵ヲ持シ、馳驅奔走シテ、爲サバル所無シ。而シテ、豊肥斯ハ、如ク、甚ダ之ヲ艱シム。稟受ニ由ルト、雖モ、亦或ハ安佚ノ致ス所ナリト。是ヨリ、苦ヲ攻メ、淡ヲ食ヒ、日夜武事是レ講ズ。或ハ曠野ニ出デ、鳥銃ヲ發シ。或ハ山村ニ行テ、民家ニ投ズ。其當直ニ當ルヤ、木兵ヲ欄笥ニ藏ク。隙友、寢ニ就クノ後、獨リ竊カニ空庭ニ出デ、槍劍ノ法ヲ演ス。或ハ深夜屋ニ登リ、火ヲ禦ガヲ習フ。是ノ如クスル者十餘年、身軀稍瘦削セリト。

櫻所子曰ク、惺窩以來、儒術ヲ以テ身ヲ立テ、家ヲ興ス者多ホカラズトセズ。而シテ、士太夫ノ品行ヲ維持シ、三百年ノ久キニ及ビル者、儒教ノ功多キニ居ルト云フモ、亦不可ナキナリ。而シテ、其間、儒士ニシテ、自ラ一地方ノ政治ヲ興力

リ、聞キ、德澤ヲ其民ニ及ホセル者ハ、獨リ熊澤蕃山アル。蕃山ノ始メ、學ニ志スヤ、朱註ニ依テ、四書ヲ研鑽シ、其師ヲ求メテ得ズ。偶、京都ノ逆旅ニ於テ、中江藤樹ノ學識德行、凡常ナラザルヲ聞キ、奮テ之ヲ許ニ至ルヤ、無下ニ臥ス。丁ニ夜、其篤志、想フ可キナリ。而シテ、業成テ後、富榮ニ處テ、驕ラズ。窮阨ニ居テ、戚マズ。其胸襟ノ洒々落落タルヲ、視ルニ足レリ。今世ノ人士、動モスレバ、地位ニ隨テ、其志嚮ヲ易エ、朝夕ニ君權ヲ主張シ、夕べニ民權ヲ唱和スル如キ者ト、固ヨリ、日ヲ同フシテ、談ズベキニ非ズ。且夫レ、今ノ學者、論士間、風俗ノ文弱ニ流ガルハ、ヲ慮カリ、且ツ、身体ヲ勞動スルハ、攝生ノ要訣ナルヲ以テ、或ハ擊劍ヲ學バベシトイヒ、體操ヲ忽セニスベカラズトシ、經濟家ハ、歐洲學士ノ言ニ

由テ、池ヲ穿テ隄ヲ築キ、溝渠ヲ疏鑿シ、漕運ヲ便ニスルノ
利ヲ説キ、或ハ森林ノ國ニ必用ナルヲ論ズ、而シテ明政府
ノ措置セラル、所モ亦森林ヲ蕃殖シ、漕運ヲ快利ニスル
等ノ事ニ、深ク注目セラル、者ノ如シ、蕃山二百年ノ昔日
ニ在テ、既ニ皆ナ之ヲ試ム、豈卓識ト謂ハザル可ケンヤ、獨
リ此ノミナラス、蕃山ハ一介ノ士ニシテ、既ニ備侯ノ殊遇
ヲ受ケ、縉紳侯伯束脩ヲ行ヒ道ヲ問フアリ、或ハ賓師ノ禮
ヲ以テ之ヲ遇スルアリ、名門右族爭テ之ヲ延クニ至ル、紀
州侯賴宣ノ蕃山ヲ禮待スル、送迎必ズ門ニ及ブト云フ、其
他貴顯ノ敬重スル所トナリシハ推シテ知ルベキナリ、現
今泰西ノ學ヲ唱ヒ、世人ガ泰斗視スルノ學士アリト雖モ、
未ダ其德望此ノ如クナル人アルヲ聞カズ、思フニ蕃山ハ

化未タ遍ネカラサルノ昔時ニ在テ、能ク斯クノ如キヲ致
セル者、命世ノオアルニ由ルト雖モ、抑モ亦其志ヲ持スル
堅忍ニシテ、勉強刻苦、實學ヲ磨礪シ、智識德望並ニ高キヲ
以テニ非スヤ、夫レ蕃山嘗テ道ヲ求ムルニ熱心ナル、無下
ニ卧スヲモ厭ハサルノ心ヲ以テ心トシテ終始變セズ、故
ニ其志ヲ得レハ、一藩ノ制度ヲ釐革シ、天下ノ人士ヨシテ、
目ヲ屬セシムルノ功業ヲ建テ、其志ヲ失ハバ、子弟ヲ教授
シテ、心ヲ風月ニ娛マシメ、幽囚セラルハニ至テ、生キテ其
道ヲ行フニ由シ無キヲ知リ、專ラ著述ヲ事トシ、後世ヲ裨
益セントス、嗚呼蕃山ノ如キハ、有爲ノ士ト謂フベキナリ、
故ニ其出身ノ始メヨリ、歿後墓ニ展拜スル者、今ニ至テ絶
サルニ至ルマデ、一モ頑ヲ醒マシ懦ヲ起ス事ニ非ルハ無

ク、皆ナ以テ傳フベシト爲ス、故ニ煩ヲ憚ラスシテ前ニ具載ス、冀クハ蕃山ノ風ヲ聞テ、志ヲ立テ節ヲ勵マス人アラシマフ。

第六、岡崎秀民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事、岡崎秀民ハ備前ノ藩士ニシテ、慶安時代ノ人ナリ、鑿ヲ以テ同侯ニ仕フ、其隣家ニ住スル青地三之丞トイヘル士ハ頗ル射術ニ勵精シ、公務ノ餘暇ニハ、夙夜射籠ヲ射テ習鍊スルヲ常トシ、晴雨ヲ問ハズ、寒暑ヲ論ビズ、遂ニ其技大ニ進ミ、善ク狂猪ノ眼ヲ射ル、或時藩侯ノ前ニ於テ五矢ヲ以テ梅花ヲ的トシテ試シニ一矢ノ其莖ニ命中セサル無キニ至ル、此ニ於テ侯深ク其技能ヲ感賞シ、猶ホ一矢ヲ以テ中央ノ寸ハ的ヲ射セシム、三之丞命ニ應ジ、矢ヲ注シテ發

スレバ、後矢ハ前矢ノ括ヲ射テ鏃ニ及ベリト、秀民、日夜離ヲ隔テハ、隣家ノ弦聲ヲ聞キ、以爲ク、三之丞ハ寒暑風雨ヲ論ビズ、日夜刻苦スル、此ハ如シ思フニ、我が業ハ如キ、夏宵ハ蚊帳ノ裡ニ在テ學ブ可ク、冬日ハ足ヲ火間ニ投ジテ讀ムベシ、武人ガ弓馬ヲ習鍊スルニ此スレバ、其難易、力ニ殊ナリ、然ルニ彼レハ其困難ナル弓術ヲ習修シ、夜ヲ以テ日ニ繼グ、我レハ容易ニ爲シ得ベキ學業ヲスラ、惜リテ、光陰ヲ徒消スルハ、豈ニ深ク省察セザルベケンヤト、爾後志ヲ立テ、朝夕ニハ仲景ノ書ヲ繕キ、夕ニハ扁華ハ、奧義ヲ探リ、弦聲ハ讀書ハ聲ニ和ス、終ニ共ニ一層ハ精カヲ勵マシ、相競テ倦ムヲ知ラザルニ至リ、秀民亦國手ノ名ヲ轟カセリ、故ニ當時備前ニ於テ、技藝ニ鍊達セル者ヲ稱スル。

必ズ先ヅ指ヲ青池ノ弓術岡崎ノ醫學ニ屈セリト。

櫻所子曰ク、人激スル所ナケレバ、發奮勵精スルノ好機ヲ

得サルモノナリ。秀民亦三之丞ト隣ヲ爲スニ非ンバ、恐ク

ハ庸醫ヲ以テ其身ヲ終ヘン。隣ヲ擇ブ豈童ニ子ヲ教ユル

ノミナランヤ。然リト雖、臣爲スアルノ士ハ、尋常庸人ノ敢

テ意ヲ經ザル所ニ於テモ、猶ホ其志ヲ激勵スル者ナリ。即

チ越前黃門ガ、阿國ノ舞ヲ觀テ泣クノ類ナリ。秀民ガ隣家

ノ弦聲ニ激セラレテ、其業ニ進ミシカ如キ、亦理ナル哉。

第七 谷松三介勤苦志ヲ求メシ事

谷松三介、一齊ト號ス。土佐人人其父時中、天性豪爽ニシテ

志節アリ。最モ儒學ヲ喜ブ。時喪亂ノ餘リ、文化未ダ開ケズ。

況ヤ僻郷最モ典籍ニ乏シ。書ヲ四方ニ求メ、多ク之ヲ儲フ。

ノ所ニ學バシム。謂テ曰ク、吾聞ク富貴ハ志ヲ失フト。田産

五百石此子孫ノ惠ム所以ニ非ハナリト。乃チ之ヲ鬻ギ、

僅カニ數頃ノ以テロフ餉スベキヲ存スト云フ。三介土佐

ヲ去リ京師ニ移リ。而シテ江戸ニ遊ビ、稻葉侯ニ事ス。暮年

之ヲ辭ス。性淡泊ニシテ財貨ヲ屑トセズ。且ツ其悟性中人

ニ逾エズト雖、臣然カモ勤苦志ヲ求ム。是ヲ以テ其學體用

アリト稱ス。

櫻所子曰ク、徂徠ハ當時名ヲ一世ニ擅ニシ。文壇ニ於テ許

ス所鮮シ。而シテ其護園隨筆ニ、谷一齊先生ナル者アリ云

云ト謂フヲ以テス。ハ以テ一齊ノ評ヲ定ムルニ足レリ。

而シテ其人悟性中人ニ逾エズ。勤苦志ヲ求メ、以テ之ヲ得

タリトセバ。世ノ學業ヲ成サントスル人。其才無キヲ憂フ
ルコ勿レ。其學資ニ乏シキヲ歎ズルコ勿レ。唯、辛苦ヲ歷嘗
スルヲ厭ハザルノ志。未ダ立タザルヲ憂ヘヨ。

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セザリシ事

新井君美、白石ト號ス。江戸ニ生ル。其父ハ常陸ノ人ナリ。年
少フシテ江戸ニ到リ。久留利侯ニ仕フ。白石初メ父ニ從テ
久留利ニ官ス。年二十一ニシテ。父ト共ニ仕ヲ辭ス。是ニ於
テ貧甚シ。人或ハ之ニ勸ムルニ。鑒ヲ業トシ。若クハ字ヲ教
ヘ。以テ給ヲ取ルノ計ヲ以テス。白石從ハズ。一ニ意ヲ儒經
ト史冊ニ刻ス。時ニ河村瑞軒殷富ニシテ多ク書ヲ藏ス。乃
チ就テ借覽ス。瑞軒心白石ノ志ヲ知リ。因テ其女
ニ配シ。納レテ以テ婿ト爲サシトス。白石肯ンヤ。後イ城

田侯ニ遊事ス。居ルコ十年。志ヲ得ズシテ去ル時。貧亦甚
シ。篋中唯青錢三百文。米三斗。ハ。曰ク此レ未ダ過ク。凍
餓ヒズト。意氣ハクモ撓マズ。白石少フシテ大志アリ。常ニ
自ラ誦シテ曰ク。大丈夫生テ封侯ヲ得ズンバ。死シテ當
ニ關羅王ト爲ルベシト。遂ニ幕府ニ仕ハ。正徳辛卯。韓使來
聘セシ時。使者ト禮法ヲ論ジ。竟ニ使者ヲシテ屈伏セシメ
シ。等殊功多シ。從五位下ニ叙シ。筑後守ニ任ズ。年六十九
シテ卒ス。古今著書。富白石ニ若クハトシ。未ダ稿ヲ脱セ
ザル者ヲ併セテ。凡ソ一百六十餘種ニ及ベリト云。
櫻所子曰ク。我邦兵戈紛擾ノ日ヲ除クノ外ハ。閭閻ヲ以テ
官職ヲ世襲スルヲ習俗タリシヲ以テ。材能アリト雖モ仕
進ノ路ヲ得ル太ダ難シ。白石右文ノ世ニ生レ。寒門ニ長シ

封侯ヲ得ントスルノ望ミヲ懷キ家ニ儉石無キモ其志氣
ヲ屈撓セズ遂ニ從五位下筑後守ニ叙任セラル、ニ至ル
令ヤ關關世襲ヲ發シ人材ヲ登庸セラル、ノ隆時ニ遭フ
若シ今日ニシテ小成ニ安ンジ遠大ノ志ヲ立ルヲ爲サ
ズンバ將タ如何ナル時ヲ待テ志ヲ立テ發奮勉勵センヤ
第九 三宅正名同九十郎貧ヲシテ苦學セシ事

三宅正名石菴ト號ス其第九十郎觀瀾ト號ス京都ノ人ナ
リ兄弟共ニ少フシテ學ニ耽リ家道ヲ視ズ是ヲ以テ資產
遂ニ蕩盡ス乃チ家什ヲ賣賣シ以テ舊債ヲ償フ則チ餘ス
所僅カ數金ニ止名第九十郎ニ謂テ曰ク今貧極ルト
雖氏短褐蔬食以テ數年ヲ支ユベシト鑽堅志愈厚ク環
堵室凡ヲ對シテ講習シ共ニ寢食ヲ忘ルニ至ル幾久

モ無クシテ窮亦極ナル是ニ於テ兄弟相携テ江戸ニ遊ビ
教授シテ給ヲ取ル居ルニ數年正名京師ニ歸リ大坂ニ來
ル時名翹然トシテ起リ弟子雲集ス中井紫菴等相謀テ官
ニ請フテ庠校ヲ建テ懷德堂ト名ク正名ヲ推シテ祭主ノ
事ヲ領セシム九十郎ハ黃門光國ノ名ヲ應ジテ國史編修
總裁ト爲リ後チ新井君美ノ薦メニ因テ幕府ニ仕ル心第
共ニ儒名朝野ニ噴々タリシト云フ
櫻洲子曰ク人ノ事業ヲ爲ス必ズ其初メニ於テ若キ
資本ヲ投ゼザル可ラズ而シテ世上遊蕩ニシテ家産ヲ蕩
盡シ家什ヲ鬻キ其甚キハ妻ヲ典シ兒ヲ賣ツルニ至ル者
ヲ視ル其學習ノ資本ノ爲メニ資産ヲ傾ク家什ヲ賣ル
至ルモ敢テ其志ヲ撓メサル者絶ラ無クシテ僅カニ有ル

所ナリ宜ナル哉其業ヲ成スニ及ビ名聲ヲ朝野ニ施シニ
至リシヲ世ノ花費ノ爲ニ八十金ヲモ愛ミズ書ヲ買ヒ師
ニ謝スルニハ一金ヲモ吝ム輩ハ猶小資本金ヲ募ラズシ
テ一大會社ヲ起サントスルガ如シ生涯碌々トシテ人後
ニ立ザルヲ欲スト雖氏豈得ベケンヤ

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事

徂徠又護園ト號ス姓ハ荻生氏小字ハ惣右エ門江戸ノ人
其父方菴鑿ヲ以テ幕府ニ仕フ延寶中事ニ坐シテ上總
流竄セラル徂徠父ニ從テ共ニ往ク居ル十三其親ハ
所ハ旧父野老其處ハ所ハ螢戸離煙既一書籍ニ乏シク又
師友無シ豫中僅々人學該解ホアルハ徂徠此ニ因
テ研究ス其警敏不群ナル幼ヨリ即チ遠志アリ是ヲ以テ

赦ニ値フテ江戸ニ還ルヨロ業殆んど大成ス初メ芝街ニ
ト居ス時ニ貧居洗フガ如シ舌耕殆んど衣食ニ給セス増
上寺ハ前ニ蘇祁ヲ賣ル家アリ徂徠ガ貧ニシテ志アルヲ
隣レシ日ニ雪花菜ヲ饋ル後チ祿ヲ食ハニ至リ月一米三
斗ヲ贈リ以テ之ヲ報ズ徂徠柳澤氏ノ侯ニ封ビラルニ
及ビ召サレテ書記ト爲ル然レハ祿尚ホ微ナリ尋デ柳澤
侯累リニ封ヲ益ス徂徠亦侯ノ寵遇ヲ以テ累リニ其秩ヲ
益シ五百石ニ至ル徂徠儒學ニ純然トシテ一家ハ見テ
立テ先儒ノ作ス所ハ一切之ヲ排ス其豪邁卓識雄文宏詞
一世ヲ籠絡ス終ニ海内仰テ此邦未曾有ハ人ト爲スニ至
レリ又少時兵學ヲ精修シ其仕途ニ就ク亦兵學ヲ以テシ
儒ヲ以テハ不或時大岡越前守忠相曰久聞ク徂徠博識洽

聞知ラザル所無シト。余將サニ試ミニ問テ以テ蹟カシメ
ントスト。乃チ招イテ問テ曰ク。世ニ螢燈ノ説アリ。何ノ謂
ゾヤ。徂徠答テ曰ク。事某年某人ノ著スル所ノ一小説ニ出
ルナリ。乃チ其書載スル所。鼠類ノ眷屬名姓。口ハ衝テ縷々
注ガガ如シ。忠相始メテ其疆記ニ服ス。其疆記亦斯類ナリ。
徂徠書ヲ看テ暮ニ向ヘバ。則チ出デハ。擔隙ニ就キ。擔隙亦
字ヲ辨ズ可カラザルニ至レバ。則チ入テ齋中ハ燈火ニ對
ス。故ニ且ヨリ深夜ニ及ブマデ手卷ヲ釋タノ時無シ。其平
素分寸ノ光陰ヲ惜ム率ネ此類ナリ。暇南郭某歲ノ元日。徂
徠ヲ訪フ。徂徠方ニ几ニ隱ツテ孫子ヲ閱ス。面垢洗ハズ。髮
亂レテ梳ラズ。新年ヲ知ラザル者ハ若シ。乃チ鹽々トシテ
テハ談シテ置カズ。南郭竟ニ新禧ヲ祝スルヲ得スシテ去
レリト云フ。

櫻所予曰ク。徳川氏ノ霸府ヲ江戸ニ開キシヨリ。昇平三百
年。其間鴻匠碩儒多シト雖也。其道德ニ於テハ。則チ藤樹仁
齋。其博學洽聞ニ於テハ。則チ徂徠物氏ヲ推ス。後チノ學者
激昂奮勵スレ也。竟ニ及ブ能ハズ。徂徠ノ學。其瑜瑕得失ハ。
則チ猶ホ免ヌガレズト雖也。亦不世出ノ豪傑ト謂ハザル
可ケンヤ。然ルニ藤樹仁齋。徂徠ノ三大家。其ニ師友無クシ
テ。書籍ニ乏シク。加フルニ其家貧窶ナルヲ以テスルモ。屹
然不撓ノ志ヲ懷キ。分寸ノ光陰ヲ惜ミ。耐忍勉強ヲモツテ。
遂ニ旗幟ヲ文壇ニ樹テ。一世ノ泰斗タルノミナラス。後世
ノ學者ヲ風靡スルニ至ル。中ニ就テ徂來ノ如キハ。其書ニ
乏キ。大學諺解一本ニ止ル。其家ノ貧キ。雪花菜ヲ食テ飢コ

支ナルニ及ビシニ非ズヤ。今ノ青年輩、動モスレバ學資ニ乏キヲ訴ヘ、書籍ヲ闕クヲ歎ジ、良師無キヲ慨スル者、至竟已レガ怠惰ニシテ、安佚ヲ貪ボルノ非ヲ掩フ、口實、ミ。若シ然ラズト謂ハ、前ノ三大家ガ、學業ヲ大成セシ傳紀ヲ視ヨ。

第十一 雨森芳洲年八十一始メテ和歌ヲ學ヒシ事
雨森芳洲、字ハ伯陽、小字ハ東五郎、京都ノ人ナリ、年十七ハ江戸ニ遊ビ、木下順庵ニ從學シ、業六ニ進ム。順庵稱シテ後進ノ領袖ト爲ス、遂ニ其薦メニ因テ、對馬侯ニ送仕シ、文藝ヲ掌ドリ、韓人ニ接待シ、名聲海ノ内外ニ馳ス。芳洲、韓語ニ通ズルヲ以テ、韓人ト相説話スル、譯者ヲ假ラズ、韓人戲レテ曰ク、君善ク諸邦ノ音ヲ操ス、而シテ殊ニ日本ニ熟ス

ト、芳洲年八十ニシテ、始メテ倭歌ヲ學ブ、其意ニ謂ラク、詩ハ則チ時アリ、之ヲ作ル、稱ス可キ者無シト雖、氏平仄ヲ謬ラザルヲ得、國風ニ至テハ、一二其法ヲ解セズ、先ヅ古歌ヲ熟讀スルニ如クハナシ、今ヨリ古今集ヲ讀ム者、一千遍而ノ後、自ラ賦スル者、一萬首、其レ或ハ少ク通ズル所アリ。ラント、乃チ二年ニシテ千遍畢ル、又三年ニシテ萬首就ル。梁川蛻巖曰ク、伯陽子ニ語テ曰ク、玉露凋傷、楓樹林、美ハ則チ美ナリ、我ガ猿太夫ノ紅葉鹿鳴、人ヲシテ感ジ易カラシムルノ愈ルト爲スニ如カザルナリト、伯陽華音ニ善シ、綜博ニシテ、藤村アリ、其品茂郷ノ下ニ出テズシテ、其言此ノ如シ、知言ト謂フ可キ者ナル哉ト。
櫻所子曰ク、我邦ノ三十一言周代ノ三百篇、其他佛經ノ偈

碩、舊約全書ノ詩篇、及び回教火教ノ神ヲ禮拜スル唱歌等。
世界各邦、皆古來此種ノ者アリ。而シテ其人ヲ感動スルハ
必ズ其國人ノ耳目ニ慣熟セル者ヲ以テ最モ深シトス。且
昔時戰亂ノ日ト雖、將士ノ心ヲ國風ニ傾クル者多シ。
中ニ就ニ義家ノ功、來關ノ咏、及び貞任ノ年を經、絲の素
糸の悲、ト云ヒカケシニ應ジタルガ如キ。宗任ノ梅花ヲ問
に、けりト云ヒカケシニ應ジタルガ如キ。宗任ノ梅花ヲ問
ハレテ直チニ國風ヲ以テ答ヘシカ如キ。類枚舉ニ違フ
アラズ。太田持資ガ、遠くあり、近くある、みの濱、千鳥鳴音に
朝の満ちと、と云フニ由テ。潮汐ヲ知り、底ハをき、淵
やハ、騷ぐ、山川の淺き、瀬ハ、と、そ、あ、だ、波ハ、な、と云フニ由
テ。利根川ヲ涉リ、板倉周防守ノ、鷲の尾の山此奥ハ、人々

ナハ、神武天皇ノ御代、ト云フニ由テ。山賊ヲ捕ヘシ
ガ如キ。國風ニ由テ。或ハ用ヲ軍陣ニ爲シ。或ハ賊ヲ拿捕ス
ルノ助ケトナル。是所謂下筆手ノ樂モ、之ヲ大用スレハ封
侯ヲ得タルガ如ク。一時ノ吟詠ニ出シ者モ、亦用ヲ爲ス
アリ。世ノ洋學者、流動ニスレバ和歌ヲ以テ。昔時公家ノ玩
弄物ノ如ク言做スハ。太ダ謬レリト謂フベシ。且ツ夫レ洋
ノ東西ニ論無ク。其言異ナレ雖、性情ノ感ヲ述ブルハ則
チ同ジ。聞ク。昔シ唐ノ僧皎然トイヘル者アリ。韋蘇列ノ詩
風ヲ擬シ。其悦ビヲ得ント欲シ。數首ヲ示ス。韋蘇列賞セズ。
因テ舊作ヲ示ス。韋蘇列大ニ賞歎シテ。凡ソ詩ハ各自ノ得
所アリ。強チ人ヲ學ビ。其心ヲ悦バシメン。ト云レバ。本色ナ
失テ精巧ナラズト誠メシト云。況ヤ日本ノ人ニシテ唐宋ノ

詩ヲ學ブハ、徒一歩ヲ學ビ、擧ニ倣フモノ、ミナルヲヤ、何
心情ヲ盡シテ、遺憾無キヲ得ンヤ、既ニ自ラ其心情ヲ盡
ス、充分ナラザル、何ゾ能ク人ヲ感動スルニ足ランヤ、芳洲
茲ニ見ルアリ、尋常腐儒、僻見ヲ打破ス、卓識ト謂フベシ
ナリ、而シテ齡既ニハ旬ヲ過ギ、古今集ヲ讀ム十遍、自ラ
スル萬首、五年ニシテ其功ヲ畢ハル、篤志ト謂フベキナリ、
世ノ齡未ダ知命ニ至ラズ、而シテ近體ノ詩數百首ヲ作ル
ニ過ギズ、解人可カラザルノ句ヲ綴リ、騷人韻士ヲ以テ自
負スルノ徒、及省スル所ヲ知レ。

第十二 太宰純、菅麟嶼ヲ規セシ文

太宰純、小字ハ彌右衛門、春臺ト號ス、信濃ノ人ナリ、但徠ノ
門ニ放テ、名聲一時ニ冠絶スル、人トノリ、嚴毅方正ニシテ、

權貴ニ對スルモ、言忌憚無シ、菅麟嶼ト云フ者アリ、才氣銳
發、年十三ニシテ、擢デラレテ幕府ノ儒官ニ列ス、一時稱シ
テ奇童子ト爲ス、然ルニ卒ニ苗ニシテ秀デズ、春臺之ヲ規
啟シテ少クモ借サズ、其忠誠激切ナル、亦以テ幼ニシテ才
氣アルモノ、規箴トスルニ足ルヲ以テ、其書ヲ譯シテ左
ニ撮録ス。

純足下ノ學ニ放ケルヲ觀ルニ、王公大人ノ學ヲ以テ戲
ト爲シ、以テ日ヲ消スル者ノ如クナルヲ無キヲ得ンヤ、
夫レ足下ハ布衣ニ非ズト雖、然カレ氏儒生ナリ、不幸
ニシテ早ク神童ヲ以テ聞ユ、幸ニ國恩ヲ蒙リ、稟粟ヲ賜
ハリ、文學ニ列シ、朝請ヲ奉ズ、以シト雖、氏以テ務ムル所
ヲ知ラザル可カラズ、古人童穉ニシテ、日ニ六藝古文數

予言ヲ誦スル者アリ。純足下ヲ識ルヨリ以來、茲ニ數年、未タ足下ノ誦スル所アルヲ聞カズ。今日ヲ以テ、前年ニ較フルニ、亦未ダ其進ム所アルヲ見ズ、而シテ進ム所ノ者ハ吹笛ノミ、近來聲價頗ル減ズ、豈ニ徒然ナランヤ。程正叔言フアリ曰ク、人三不幸アリ。少年ニシテ高科ニ登ル。一ハ不幸ナリト。足下其レ諸レヲ思ハ、又曰ク、吾子冬ハ則チ霜雪ヲ畏レ、夏ハ則チ雷ヲ畏ル。一歳ノ内、雷ト霜雪トヲ避クレバ、則チ其畏レ無キ者幾ンド稀ナリ。古語ニ所謂首ヲ畏レ、尾ヲ畏ル、身其餘リ幾クゾト。吾子之ニ近シ。純聞ク、西域ニ無雷ノ國アリ、南方ニ八蠶ノ地アリト。吾子乃チ彼ニ生セズシテ此ニ生ル。何ゾ造物ノ吾子ニ利ナラザルヤ。予ハ則チ以爲ク、吾子ハ患稟受薄キ

ニ由ルト雖、凡亦豈ニ奉養大ダ厚ク安佚度ニ過グルヲ以テ自ラ其疾ヒヲ崇ムルニ非ズヤ。吾子少ナリト雖モ、幸ニ一タビ諸レヲ思ハ。櫻所子曰ク、世ニ奇童ト稱セラルモ、長ジテ後チハ平凡尋常所謂苗ニシテ秀デサル者、少ナシトセズ。是他無シ。其一科ヲ卒ヘ一書ヲ誦スルモ、隣里郷黨ノ稱譽スル所トナルヲ以テ、早ク既ニ驕慢ノ心ヲ生ジ、志氣自カラ挫ケテ、亦勉強耐忍、積ムニ歲月ヲ以テスル能ハザルニ由ル。且ツ夫レ驕心ハ、人世百般ノ事業ヲシテ、軟弱委靡ナラシムルノ熾毒ナリ。況ヤ幼齡ニシテ驕心ヲ生ズルモハ、其精神頓惰ニシテ活潑ナラズ。安佚ヲ好ムテ勤苦ヲ欲セズ。終身ノ景狀ハ、宛カモ阿芙蓉煙ヲ喫スル者ト。相匹似スルニ至ラン。

豈其業ノ大成ヲ望ムベケンヤ太宰春臺ガ管嶺嶼ニ忠告
スル所ノ如キハ世ノ才氣アル少年ガ頂門ノ鍼砭ニシテ
亦其苦學ノ志ヲ培養スルノ肥料ニ供スベキナリ

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ毫モ志ヲ折カザリシ事

吉益東洞本姓ハ畠山氏安藝ノ人ナリ東洞少フシテ志氣
アリ以為ク我が遠祖政長ハ管領タリ我天下ハ名族トシ
テ豈再ビ家ヲ興サハル可ケンヤト恆ニ兵法ヲ學ビ馬ヲ
馳ヤ劍ヲ試ム年已ニ長バルニ及ビ自ラ以為ク太平ノ世
武術ニ長ゼシトイフ氏亦其技倆ヲ試ムル日無シト是ニ
於テ慨然トシテ誓テ曰ク大丈夫良相トナラズンバ當
ニ良醫トナルベシト遂ニ醫術ニ心ヲ潜メ黽勉スル丁歳
アリ日夜怠ラズ業成テ後々邊僻ノ地ニ在ル疾ヲ救フノ

功多カラズ業ヲ授クル弘カラズ京都ニ移住センニ若
バト元文三年家ヲ携ヘテ京洛ニ移リ專ラ仲景ノ治方ヲ
唱フ東洞京都ニ在リテ其業未ダ盛リニ行ハレズ門生進
ム丁無シ偶兪兒ノ贅ヲ掠メ去ルニ遭ヒ家更ニ貧シ其友
村尾某仕途ニ就カンコトヲ勸ム東洞可カズト曰ク初
メ我レ子ヲモツテ知已ナリトス今ニシテ後子子ハ我レ
ヲ知ルモクニ非ルヲ知ル我レ貧ニシテ且ツ老親ヲ用
雖氏何ゾ志ヲ降シテ祿ヲ為メ仕フルモノナランヤ貧
ハ士ノ常ニシテ窮通ハ命ナリ假令我術行ハレズ離氏
天豈ニ斯道ヲ喪バザンヤト而シテ家益貧ク饑餓マサニ
且タニ迫ル東洞晏然トシテ憂戚セズ一日其舊識ナル賈
翁アリ東洞ガ貧ヲ憐ミ金若干ヲ與フ東洞毅然トシテ曰

ク我レ故無クシテ金ヲ受クベキニ非ズ。又之ヲ受クルモ
報ユルヲ日無ク。賈翁之ヲ強テ曰ク。吾何ゾ償ヒ求ムル
者ナラシヤ。且ツ先生ヲシテ凍餓ニ陷ラザラシメントス
ル者ハ世人ノ生命ヲ救済センガ爲メナリト。東洞其言ニ
感ジテ之ヲ納レ。漸飢寒ヲ支ノルコトヲ得タリ。幾クモ無
クシテ一人ノ病者ヲ診シ。藥劑ヲ投ゼシニ。山股東洋其席
ニ在リ。大ニ其主方ノ的當ナルヲ賞讃ス。病者モ亦日アラ
ズシテ愈ユ。東洞亦東洋ノ尋常ナラザルヲ知リ。厚ク之ト
交ハル。東洞ノ名之ヨリ世ニ顯著ス。年五十二シテ。類聚方
藥徵方極ヲ撰ミ。專ラ古方醫ノ規律ヲ立ツ。晚年ニ及ビ。中
津候。祿五百石ヲ以テ召スト。雖氏應ビズ。而シテ世人或ハ
其術ヲ信ジ。或ハ之ヲ疑フ者アル氏亦時カモ意トセズ。安

永二年七十二ニシテ歿ス。
櫻所子曰ク。東洞ハ管領島山氏ノ裔ニシテ。即チ名族タル
ニ由リ。奮然トシテ志ヲ起シ。太平ノ世。武術ヲ施スニ所無
キヲ觀テ。刀圭ノ業ヲ以テ當時ニ鳴ラントス。而シテ治ヲ
乞ヒ業ヲ問フ者稀ニシテ。櫛頭蛛網ヲ張り。釜底塵ヲ堆ス
ルニ至ルモ。敢テ初志ヲ屈撓セズ。遂ニ其名遠邇ニ喧傳シ。
重祿ヲ以テ招聘セラレ。ニ至ルモ。亦敢テ利祿ノ爲メニ
節ヲ枉ゲズ。其誓フ所ニ背ムカズ。亦名族タルニ蓋ヂスト
謂フベシ。夫レ始メアルコトアリ。能ク終アルコト少キハ。社會
ノ通患ナリ。其志操ヲ持スル。東洞ノ如クナランニハ。終リ
アルニ幾幾ナカ。

第十四 杉山基明ヲ失シテ鑒ニ志シタル事

杉山某ハ遠江國濱松ノ人ナリ。十歳ニシテ明ヲ失フ。幼キ
ヨリ天資豪爽ニシテ。名ヲ天下ニ成サント欲スルノ志アリ。
然レ氏既ニ明ヲ失テ業トスベキ無シ。意ヲ鑿術ニ決ス。
甫メ年十七。鍼鑿トナリ。江戸ニ赴キ。日夜其技ヲ研精ス。年
ヲ累ネテ終ニ妙解ヲ得其名大ニ發シ。四方治ヲ乞フ者鱗
至。雜還シ。蔚トシテ。鉅工トナル。公侯大人招請。晝日無シ。將
軍綱吉公之ヲ聞キ。召テ左右ニ侍セシム。一日公問フテ曰
ク汝デモ亦欲スル所アリヤ否ヤ。對テ曰ク有リ。臣一眼ヲ
得ント欲スト。左右大ニ笑フ。公曰ク是レ戲言ト雖臣真ニ
憫ム可キナリ。乃チ宅地ガ一町ヲ本所第一橋ノ側ニ賜フ。
蓋シ俗此橋ヲ呼ビ。一目ト爲スヲ以テ。故ニ此命アルナ
リ。因テ祿スルニ五百石ヲ以テシ。檢校職ニ任ズ。又地ヲ京

師ニ賜ヒ。清張菴ヲ置キ。以テ天下警者ノ事ヲ總ベシム。某
專ラ救濟ヲ好ム。初メ貧キ時尚ホ囊橐ヲ傾ケ。以テ貧人ヲ
贍ス。家道已ニ饒カナルニ及ビ。賑恤スル所極メテ多ク。警
人ノ窮乏ナル者ニ放テ。最モ厚キヲ加フ。元祿七年ヲ以テ。
江戸ニ歿ス。京都江戸ハ警者流某ハ德ヲ仰ギ。其像ヲ作テ。
之ヲ敬禮スルニ至レリト云フ。
櫻所子曰ク杉山某十歳ニシテ明ヲ失フ。猶ホ能ク其志ヲ
勵マシテ一技ヲ究ム。其身ヲ立テ家ヲ興ス。丁此ノ如シ。兩
眼明カニシテ。秋毫ノ末ヲ察ルニ足ル者ニシテ。我レ能ク
事業ヲ爲スニ足ラズトスル者ハ。自暴自棄スルニ非ズシ
テ何ヤ。

卷十五 同明ヲ失シテ後チ詩學ニ志セシ事

江戶ノ人ニシテ、雕工ノ子ナリ。六歳ニシテ痘ヲ
病ム。明ヲ失ス。八歳ニシテ醫術ヲ學ビ、常ニ指ヲ以テ字
ヲ掌上ニ畫シ、書傳ヲ記憶シ、日ニ萬言ヲ誦シ、十四五歳ニ
シテ、其技粗通ズ。十七歳ハ時、服南郭ガ李肇龍ハ、唐詩選ヲ
講説スルヲ聞キ、詩ヲ以テ醫術ニ換ヘ、唐明諸家ハ詩ヲ講
ゼントス。人ヲシテ之ヲ讀マシメ、一タビ聽テ即チ記シ、年
ヲ經テ忘レズ。諸學生ノ解スル能ハサル所、通曉セシ敏ナ
リ。後チ高蘭亭ニ從テ學フ、而後昭明ガ文選、楊士弘ガ唐音、
高廷禮ガ唐詩品彙、正聲、李肇龍ガ古今詩刪、李杜ハ全集ハ
類、皆能ク之ヲ暗記ス。事ヲ策シ、古ヲ談バル。殆ンド老博士
ハ如シ。人神仙ヲ以テ之ヲ目スルニ至ル。初メ高蘭亭ノ詩
ヲ以テ江戸ニ興ルヤ。服南郭ト並ンデ海内ヲ旗鼓シ、一時

ヲ風靡ス。聲稱縉紳ノ間ニ藉甚タリ。蓋シニ家法ヲ唐明ニ
誦シ、意ヲ李王ニ刻シ、格調整令、紀律森嚴ナルヲ以テナリ。
蘭亭歿シテ後チ、其門人皆玄圃ニ從フ。南郭特ニ耆壽ニシ
テ世ニ存シ、其赤羽橋ニ居ルヲ以テ、人之ヲ赤羽ト稱シ、玄
圃ハ萱葉坊ニ居ルヲ以テ、人之ヲ萱洲ト稱ス。公卿大夫ヨ
リ、以テ青衿子弟ト、縉素黃冠トニ至ルマデ、苟クモ詩ヲ學
バント欲スル者、刺ヲ其門ニ修セザルハナシ。南郭歿シテ
後チ、玄圃特ニ蘭亭ノ高弟ナルヲ以テ、詞壇ニ牛耳ヲ執レ
リ。玄圃既ニ詞藻ヲ以テ關東ニ睥睨シ、聲價一世ニ高シト
雖、氏謙讓シテ常ニ謂ラク、予ガ性聲音ニ拙ク、針按ニ拙ク、
明ヲ失スルノ後チ、其學習スル所、百事通ズル所無シ。惟、詞
藻ハ、他技ニ比スレバ、耿々トシテ、線路ノ明カナルアル

ハミト、其死スルノ後子、門人遺稿ヲ編輯シテ六巻ト爲シ、
藍水遺草ト曰フ。

櫻所子曰ク、聞ク玄圃常ニ人ニ謂テ曰ク、諸君、視タル面目、
一リ、然ルニ、不慧ナルト斯クハ如シ。五官果シテ何ハ用ヲ
カ之レ爲ヤ。玄圃ハ六歳ニシテ明ヲ失シ、其孿ヲ學ビ
詩ヲ學ブ、遂ニ蘭亭南郭ニ次テ、詞壇ノ元帥タルニ至ル、實
ニ我輩兩目炯然タル者ヲシテ、愧慙ニ堪ヘザラシム、然リ
ト雖、一瞥者ニシテ樹立スル所アル猶ホ此ノ如シ、五官
四肢、缺クル所無キ者、終身碌々トシテ、名ヲ成ス所無クシ
バ、豈ニ獨リ心ニ愧ヂザランヤ、苟モ之ヲ愧ヅル氏ハ、速カ
ニ奮勵シテ其志ヲ興起シ、玄圃ヲシテ、笑ヲ泉下ニ忍バン
ムルト勿カレ。

第十六 佐久間彦四郎年卅六ニシテ學ニ志セシ事
佐久間彦四郎、洞巖ト號ス。奥州ノ人、仙臺侯ニ仕ル。幼ニシ
テ聰慧、其父親重、京都ニ祇役ス。洞巖母兄ト家無在リ、書ハ
兄ニ學ビ、日夜勤習ス。十歳ニ及バコト、數其兄ニ代テ簡牘
ヲ書シ、父ノ許ニ贈致ス。屬辭比事、人々指揮ヲ煩ハリズ、老
成ノ手ヨリ出ルカ如シ。洞巖十四五歳ニシテ、頗ル繪事ヲ
好ム。而シテ、師友無シ、畫本ヲ臨摸ス。好ムデ、山水ヲ畫シ、嘗
テ僧雪舟ガ、江湖ハ圖ヲ觀テ、運筆ハ法ヲ悟ル。是ヨリ以降、
畫ク所尤モ風致アリ。時ニ佐久間友徳ト云フ者アリ、又畫
ニ巧ミナリ。仙臺侯ノ爲メニ寵遇セラレ、擢デラレテ畫所
ト爲ル。嘗テ洞巖ガ畫ク所ヲ觀、以テ甚ダ奇ナリト爲シ、苦
ゴロニ親重ニ乞フテ、之ヲ養子トシ、其業ヲ繼ガシム。時ニ

年十七遂ニ祿百五十石ヲ發テ洞巖妙年ニシテ書ヲ善ク
シ又畫ヲ善クス然カレ氏學問ノ業ニ至テハ未ダ嘗テ之
ヲ學バズ歲三十六ノ時ノ爲メニ二喬ガ案ニ據テ書ヲ
讀ム圖ヲ畫ガク其人ニ喬ノ事ヲ問フ洞巖喬ガ何人ノ婦
タルヲ知ラズ大ニ之ヲ慙ダ遂ニ遊佐次郎左衛門ニ從
テ學ブ經義ヲ講習シ博ク歴史ヲ究ム遂ニ儒術ヲ以テ興
利ノ間ニ顯著ス仙臺府ノ專ラ朱子學ヲ尊信セシハ洞巖
ヲ以テ嚆矢ト爲ス洞巖亦詩歌ニ巧ニシテ新井白石ト情
交尤モ密ナリシト云フ
櫻所子曰ク洞巖妙齡ニシテ繪事ヲ好ミ師友無クシテ造
詣スレ所アル者豈精鍊深究ニ由テ得タル者ニ非ズヤ其
年知命ニ近キニ及ビ初メテ學ニ志シ遂ニ儒ヲ以テ興羽

ニ顯ハルニ至ル是豈小成ニ安ズル者ノ能ク爲ス所ナ
ランヤ

第十七 小川信成勸學文ヲ臨模シテ學ニ志セシ事

信成泰山ト號ス江戸ノ人ナリ幼ニシテ戲遊スル常ニ筆
硯ヲ愛ス苟モ寸帛尺紙ニ遇ヘバ意ニ隨テ科斗蚯蚓ノ字ニ
似テ畫ニ似タルノ狀ヲ作テ五六歲ニ至リ頗ル字體ヲ辨
ズ安永中松山敬和ト云者アリ善書ヲ以テ聞ユ嘗テ泰山
ヲ見嘆ジテ曰ク斯兒凡ニ非ス且ツ書オアノト述テ爲メ
ニ司馬溫公ガ勸學ノ文ヲ書シテ之ニ與テ泰山臨模シ且
誦シテ怠ラズ漸ク文意ヲ解シ讀書ノ人ニ益アルヲ知
リ初メテ學ニ志アリ時ニ年僅ニ七歲ナリ父之ヲ喜ビ業
ヲ其親ニ善キ所ノ山水北山ニ受ケシム北山授クルニ太

史公ハ文ヲ以テス泰山受ケテ之ヲ讀ミ項羽ガ書ハ以テ
姓名ヲ記スルニ足ルハ言ニ感ズル所アリ是レヨリ
復タ臨池ヲ事トセズ意ヲ決シテ書ヲ讀ム其タビ謁ヲ
北山ニ執リシヨリ烈風大雨ト雖氏未ダ嘗テ師家ヲ闕
踏マズンバアラズ曾テ大ニ雪フル一巨室ヲ戴ルテ之
赴ク途未ダ半バニ至ラズ雪積リ空重クシテカ之ニ勝ム
ル能ハズ顛蹶シテ大ニ膝ヲ傷ツカ人憐ムデ之ヲ扶ケ勸
ムテ家ニ歸ラシムレ氏肯シセズ遂ニ師ハ許ニ至リ痛ヲ
忍ビ業ヲ受クルヲ常ハ若シ此隣傳ヘテ美談ト爲ス泰山
稍長ズルニ及ビ斬然トシテ頭角ヲ見ハス人ノ未ダ讀ム
能ハザルノ書ヲ讀ミ闢幽ヲ發伏シ微旨ヲ推開セント欲
スルヤ其坐傍常ニ老莊晏嬰墨列呂商國策等ノ書ヲ置キ

巡覽シテ之ヲ讀ム衍文錯簡枯屈聲牙讀ミ難キヲ遇
ニ之ヲ校究シテ其說ヲ解ミトセザレバ則チ措カズ秋玉
ガ校定スル所ノ墨子全書ハ經說數篇ニ至テ之ガ句讀ヲ
下マス能ハズ其訓讀ヲ闕ク泰山發憤シテ之ヲ讀ミ索隱
攻微前後ハ貫紳シ墨子考六卷ヲ著シ竟ニ墨子全書ヲシ
テ展卷瞭然タラシム當時諸儒皆其墨子ニ大功勞アルヲ
稱ス天明五年泰山勞瘁ヲ病ムデ歿ス時二年僅ニ十七病
革ルニ至リ手未ダ卷ヲ釋カズ筆硯書帙枕邊ニ狼藉タリ
シト云フ
嬰所子曰久太田錦城泰山ガ著スル所ノ經子遺說ニ序シ
テ曰ク若シ此人ヲシテ今日ニ存在セシムバ一代ノ儒宗
當ルニ此子ヲ推スベシト斯言溢言ニ非ルナリ錦城ハ

泰山ヨリ長バル丁五歳ニシテ同ク北山ノ義疑塾ニ在リ
シト云フ。泰山初メ勸學ノ文ヲ臨摸シ且ツ誦シテ學ニ
志シ。太史公ノ文ヲ讀ムデ感悟スル所アリ。臨池ヲ事トセ
ズ。烈風大雨ト雖モ敢テ師家ニ至ラズシテ休止スル丁ヲ
爲サズ。顛蹶膝ヲ傷クルモ痛ヲ忍ムデ業ヲ受クルニ至ル。
七歳ノ幼童ニシテ其耐忍強勉ノ氣力ハ復カニ壯年血氣
ノ人ニ勝サル丁速シ。故ニ其書ヲ讀ム人ノ未ダ讀ム能
ハザルノ書ヲ擇ムデ之ヲ讀ミ古賢ノ道ヲ明カニシテ以
テ後世ヲ裨ケント欲シテ之ガ解説ヲ作クル其刻苦勵精
大患其身ニ在ル手卷ヲ釋カザルニ至ル其世ニ益スル
志深切ナリト謂ツバシ。若シ泰山ヲシテ歐洲ニ生レシ
ハ波斯ノ古代ニ行ハレタル鐵形ノ文字ヲ讀ミ東洋ノ

學ヲ一變ヒシ偉功ヲ以テ獨リアインケテルチユペロンニ
擅ニセシメザリシナラシ。今ノ洋學者中動モスレバ翻譯
ノ價ヲ求ムルニ急ナルガ爲メニ原文ノ艱澁ニシテ容易
ニ解ラシ難キ所アレバ之ヲ脱除シ常ニ好ムデ文章ノ平
夷ナル者ヲ擇ムデ之ヲ抄譯スルカ如キ一比スレバ大ニ
遲延アリ。歐洲ノ學ヲ鍊修スル徒奮興勵精能ク泰山ノ
遺蹟ヲ追ヒ世人ノ未ダ譯スル能ハザル書籍ヲ擇ムデ之
ヲ譯述シ或ヲ發シ微ヲ闡カバ以テ世ヲ益スル大ナラン。
是我ガ熱望スル所ナリ。

第十八 山中猶平告ゲズシテ京梓ヲ離レシ事

山中猶平。天水ト號ス。伊勢ノ農夫ナリ。以フシテ學ヲ好ム。
産業ニ栖々シテ意ヲ經史ニ專ラニスル能ハズ。因テ京都

ニ遊學セシヲ謀カル。其父許サズ。遂ニ告ベシテ奔テ
京ニ之キ。偏ホク諸儒ノ間ニ遊バ。一モ其意ニ足充スル者
無シ。遊未ダ甚ダ久シカラズシテ。囊橐都テ盡ク。窮苦得テ
言フ可カラザルナリ。然リト雖モ未ダ嘗テ少クモ初志ヲ
折カズ。學問益勉ム。又江戸ニ至ル。浪落萬狀。傭書ヨウショヲ以テ食
ヲ給ス。其窮先キヨリモ甚シ。以テ憂ヒトセズ。博學諸名士
ニ交ハル。又其意ニ充足スル者ナシ。嘗テ山本北山ヲ鑒官
某氏ノ家ニ見テ。經義ヲ論辨ス。大ニ喜ビ。以テ宿望ヲ得タ
リト爲ス。贊ヲ其門ニ執ル。時二年二十三。北山ハ二十九ナ
リ。是時北山業未ダ盛ナラズ。奴僕ヲ買フテ給使ニ當ツル
ヲ能ハズ。北山躬自タテマツフ竈ニ當タリ。天水ハ同。孰ノ東方旗山
ト共ニ水ヲ階ヒ。薪ヲ伐リ。其勞ニ服事ス。幾クモ無クシテ、

才俊ノ士門下ニ輻湊シテ。而シテ業一時ニ盛昌ナリ。天水
能ク之ヲ獎成スル尤モ多シ。天水尤モ心ヲ文章ニ留ム。思
ヲ構シ草ヲ起シ。名物ヲ狀貌シ其微巧ヲ施ス。俄頃ニシテ
節ヲ成ス。老成人ト雖モ之ト並ビ駢スルヲ能ハズ。天水告
ゲズシテ鄉關ヲ出デタルヲ以テ。人皆之ヲ尤ガム。天水乃
チ曰ク。產ヲ治ム業ヲ饒フハ。姊弟ニシテ足レリ。大丈夫將
サニ爲ス。アラントスルヤ。其始メ多クハ産業ヲ事トセ
ズ。事ヲ好ム。テ然ルニハ非ズ。彼レ此レト輕重アリテ。勢ヒ
兩全ヲ得ザレバナリ。吾道義ヲ發揮シ。名教ヲ維持シ。上ニ
大人ノ心ヲ正シ。下モ子弟ノ行ヲ率中。往聖ニ繼ギ來學ヲ
啓クハ。數頃ノ田ヲ耕ヤシ。數斛ノ粟ヲ希ガヒ。幸ニ饑寒ヲ
免ガレ。朽テ糞土ト爲ル者ニ孰與レゾヤ。事業ノ大ナルハ。

學問ニ若クハナシ。家ニ居テ能ク千金ヲ致スモ、猶ホ其半ニ比スルニ足ラズ。矧ヤ其富貴必シモ期ス可カラサルヲヤ。ト。天水年二十五ニシテ、青霞亭ヲ城東本街ニ築キ、生徒ニ教授ス。三十歳ニ至ルニ及ビ、其門ニ入ル者、前後總テ五百餘人。井董堂、松浦篤所、大窪天民等、高名ハ士皆其素簞中ヨリ出ツ。寛政二年ノ春、疫ヲ病ムデ歿ス。年三十三。其精ヲ著述ニ専ラニスルヲ以テ、遺稿若干部アリ。櫻所子曰ク、天水ハ草莽ノ一布衣、學ニ志シテ窮苦スレバ、少々モ其志ヲ屈セズ。遂ニ大都ニ在テ門戸ヲ張リ、士大夫ヲ教誨スルノ地位ニ至ル。其大丈夫將サニ爲スアラントスル云々ノ語、以テ其志ノ遠目ヲ大ニシテ、小成ニ安ンズル人ニ非ルヲ知ルニ足レリ。今世志ヲ學業ニ傾ケ、千里笈ヲ負ノテ都門ニ遊フ輩、囊底空渇シテ窮苦如何トモスル能ハザルニ際セバ、頗ニ平生ノ志操ヲ挫折シ、復タ學業ヲ勉ムルノ念無ク、水ヲ擔ヒ木ヲ伐リ、自ラ炊爨ノ執ルノ勞ニ服事スルヲ欲セズ。漫ニ豪爽ノ言ヲ放ニシ、結落ノ行ニ摸シ、粗暴至ラザル無ク、頗ル醜陋ノ態ヲ極メ、世ノ人ヲシテ言フ可クシテ行ハルベカラザル説ヲ目シテ、書生論ト呼ビ、鄙野ノ行ヒヲ目シテ、書生風ト稱スルニ至ラシムル者ハ他無シ。其心裡堅忍不撓ノ志ヲ樹立セズ、刻苦進取ノ操ヲ保有セサルヲ以テナリ。吁、明治ノ昭代ニ生レ、口ニ自主獨立ヲ説キ、開化文明ヲ談ズルノ徒ニシテ、寛永時代ニ於ケル東海ノ一農夫猶平其人ニ耻ル無キ者、幾千カアル。

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

石作貞駒石ト稱ス。信濃ノ人。同國福島、山村氏ニ仕ス。山村氏ノ家子良由、少フシテ文學ヲ好ミ、駒石ガ人タルヲ愛シ、勸ルニ讀書ヲ以テス。始メテ郷先生ニ從テ、四書ハ句讀ヲ受ク。時ニ歳十九ナリ。其學ニ志シテヨリ、僻邑ノ良師友無キヲ憂ヘ。明和三年ノ春、勢州來名ニ適キ、南宮大猷ニ學バント請フ。山村氏之ヲ許シ、其給資ヲ厚フシ、以テ行カシム。駒石學ニ志スハ、晩キヲ悔ミ、日夜誦習シテ怠ラズ。寢食ヲ忘ル、ニ至ル。故ヲ以テ其學大ニ進ム。三年ヲ經テ福島ニ歸ル。邑ノ子弟皆從テ之ヲ學ブ者多シ。是ヨリ山村氏愈之ヲ敬愛シ、終ニ室老ト爲リ。治下ノ舉措、其手ニ決ヒリト云フ。

櫻所子曰ク、年十九ニシテ、始メテ四書ノ句讀ヲ受ク。學ニ

志ス。晩シト謂フベキナリ。然レモ日夜怠ラズ。三四年ニシテ學ヲ成ス。ニ至ル。之ヲ行旅ノ客ニ譬フ。陸路十里ヲ以テ、尋常旅客一日ノ行程トス。而シテ以ク怠ル者ハ、三五里ヲモ放行シ難カルベシト雖モ、晝夜兼行セバ、二十里若クハ三十里ヲ往クベキガ如シ。運歩シテ怠ラザレバ、跛者ト雖モ、猶ホ數千里外ニ達スベシ。健脚ナル者ト雖モ、路傍ノ花ニ戯レ、壚頭ノ酒ニ顛セバ、一里ヲモ行クベカラズ。人オアリ不才アリ、如ヨリシテ學ニ志スアリ。弱冠若クハ中年ニシテ、初メテ學ニ志スアリ。其志ヲ起スニ遲速アリ。其學ニ通スルニ利鈍アリト雖モ、學ムデ怠ラザレバ、共ニ造詣スル所相殊ナリ。無シ。特リ學問ノ事ヲミナラズ。人世百ノ事業、皆然カラザルハナシ。

第二十 田邊希文孟子ヲ講ズルヲ聞キ志ヲ立テシ事
田邊希文、晉齊ト號ス。元祿五年、京都仙臺侯ノ邸ニ生ル。晉
齊幼ニシテ夙慧。一日、鄉先生ノ孟子ヲ講ジ、人皆大驚。希
文可シハ、章ヲ聞キ、忻然トシテ追慕。心アリ。謂テ曰ク、皇
朝伊周企及ス可カラザルガ若シ其他ハ未ダ學ムデ至ル
可カラザル者アラズト。其長ズルニ及ビ、經義ヲ以テ縉紳
之間ニ稱セラル。晉齊京都ニ教授スル丁七年、其名時ニ著
聞ス。仙臺侯其爲ス所ヲ喜ビ、召見シテ月俸三トロヲ賜ヒ、
別ニ門ヲ爲サシム。儒官ト爲リ。仙臺ニ移居ス。其職ニ在
ル二十年、其勞ヲ賞シ、永地入三百石ヲ加賜ス。禮遇甚ダ渥
シ。幾クモ無クシテ擢テラレテ世子ノ傳トナリ。又四百石
ヲ加賜ス。先キノ加フル所ト併セテ七百石。班中老ニ至ル。

其殊恩非常。此ハ君臣ハ遭遇ニアラズ。夫レ仙臺ハ大藩ニ
シテ貴重ノ臣無キニ非ズ。又文學ノ臣少キニ非ズ。然レ臣
晉齊ノ若ク出身シテ進ミシ者ハ未ダ聞カザル所ナリト
云フ。

櫻所子曰ク、中江藤樹ハ大學ノ天子ヨリ以テ庶人ニ至ル
ハテ、壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以テ本ト爲ス。ノ章ヲ讀ミ、其
品行ヲ鍊修シ。遂ニ近江聖人ト稱セラレ。其德一地方ヲ薰
陶シ、歿後猶ホ里閭ニ崇敬スル所トナル。田邊晉齊ハ孟子
ノ人ミナ大驚。タルベシノ章ヲ講ズルヲ聞キ、學ムデ至ル
ベカラザルナシトシ。志ヲ勵マシテ學業ニ從事シ。遂ニ一
大藩ニ中老ト班列スルニ至ル。而シテ尋常儒士ハ日ニ孔
孟ノ義ノ道ヲ談ジ、六經ヲ諳ンズルニ至ルモ終生碌々ト

シテ人ノ後ヘニ在リ。蠹魚ト伍ヲ同フスルノミ。讀ム所ノ
書ハ則チ同一ニシテ。収ムル所ノ結集。此ノ如クノ差アル
者何ゾヤ。曰ク唯志ヲ立タルト否ラザルトニ在ルノミ。之
ヲ鑒ノ藥劑ヲ調和スルニ譬フ。庸鑒ノ之ヲ用ユルキハ。ギ
ナモルヒネト雖。起死回生ノ功ヲ奏スルニ足ラズ。偶以
テ患者ヲシテ夭折セシムルノ懼レアルノミ。而シテ良鑒
ノ之ヲ用ユルキハ。牛溲馬勃モ善ク人ヲシテ壽域ニ躋ボ
ラシムルノ材料トナルガ如シ。今ヤ開明ノ隆運ニ属シ。我
輩ガ蒙ヲ啓キ。我輩ガ頑ヲ廉ニシ。我輩ガ懦ヲ起スノ良藥。
其料ニ乏シカラズ。希羅古賢ノ言行。得テ知ルベク。歐米前
哲ノ論理。得テ聞クベシ。然リト雖。假令之ヲ知リ之ヲ聞
クモ。躬ニ行フノ志無クンバ。恰カモ庸鑒ニシテ。多クノ良

藥ヲ貯藏スルガ如シ。昔日ノ腐儒ト一輩ノ人タラサル者
幾ンド希ナリ。思ハザル可ケンヤ

第十一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事

永富鳳介ハ獨嘯菴ト號ス。長門ノ人。年十一ニシテ。古人ノ
節ヲ慕ヒ。經史ヲ讀ムヲ好ム。既ニシテ良師友無キヲ憂ヘ。
一夜。青錢百文ヲ持テ。赤馬關ニ走リ。舟ヲ買テ。將ニ東遊セ
ントス。或人諭シテ曰ク。兒ハ實ニ兒ナリ。百錢以テ千里ニ
遊。可キヤト。鳳介笑テ曰ク。子ハ乃チ何ゾ。迂ナル。父母之
ヲ聞カハ。人ヲシテ追ハシムル必セリ。固ヨリ遠遊ヲ許サ
ズト。遂ニ京都ニ至リ。居ル。小期年。意ヲ得ズシテ歸ル。後チ
執ニ至リ。山縣周南ニ師事シ。晝夜學々トシテ讀書ヲ廢セ
ス。群籍ヲ涉獵スル。人ニ陪從ス。二十歳ノ時。京都ニ遊ヒ

始メテ山陽東洋ニ謁ス東洋其塾ニ寓セシメテ之ヲ優遇
ス鳳介始メ塾ヲ喜バズ東洋ノ言ニ感激シ志ヲ醫術ニ專
ラニス鳳介東洋ノ門下ニ在ル其聲名早ク京都ニ著顯シ
後々大阪ニ僑居スルニ及ビ其業益益東洞ト雁行シテ名
聲遠邇ニ喧傳スト云フ

鳳介塾ヲ以テ業ト為スト雖ドモ其志ハ經世ヲ以テ自ラ
任ズ其言ニ曰ク道ヲ學ブハ志ナリ塾ヲ行フハ業ナリ敢
テ志ヲ以テ業ヲ廢セズ業ノ為メニ志ヲ棄テズ夫レ志ハ
勉メザル可カラス夫レ業ハ精ナラザル可カラズト
撰所子曰ク志アリト雖氏恆産無ケレバ以テ其志ヲ成ス
ニ足ラズ業ニ精ナリト雖氏志ニシケンバ解語ノ器械ノ
如シ志ニ勉メ業ニ精ニシテ真ニ有用ノ人タル可シ鳳介

其志ハ年僅カニ一ニシテ決然鄉關ヲ去テ良師友ヲ求
ム其業ハ海内醫術ノ冠冕タリシ吁亦偉ナル哉

第ハニ宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事

維翰通稱三古衛門龍門ト號ス紀列ノ人ナリ寛保元年ノ
四月、父ヲ負フテ江戸ニ赴ク驛舎ニテ盜ニ遭ヒ資銀ヲ喪
フ乞食シテ關ニ入ル湯島菅廟祠官某ノ家ニ寓スル一
年ニシテ後々湯島切通坊ニ僑居ス窮迫殊ニ甚シ濡書シ
テ食ヲ給ス嘗テ贊ヲ服南郭ニ委シ芙蓉社ニ入ル門下ハ
士其能ヲ妬忌シ惡聲數臻ハ是ニ於テカ快々トシテ望ミ
ヲ失フテ引去ル退テ六經ヲ修メ敢テ世ニ交ハラズ名聲
大ニ起ル門人益進ミ其業頗ル盛ナリ諸侯之ヲ聘スル者
アリト雖氏皆辭シテ起タズ當時文章家ト稱スル者ハ服

南郭餘熊耳ニ推服ス。龍門ハ名之ニ亞グト云フ。其經義ヲ推ス者ハ、太宰春臺宇瀾水ニ減セズ。晚年ニ至テ交遊海内ニ遍ネシト云フ。
櫻所子曰ク龍門初メ江戸ニ遊ブ。乞食シテ關ニ入ル。其都門ニ寓ズル。傭書以テ飢寒ヲ支フ。之ニ加フルニ南郭ノ門ニ入り。同門ノ士、其能ヲ妬ミ。南郭亦讒間ヲ信ジテ之ヲ厭薄スルニ至ル。其困頓思フベキナリ。然ルニ龍門屹然トシテ其志ヲ屈セズ。終ニ一時ノ文宗タル春臺南郭ト名ヲ齊フスルニ至ル。今世學資ノ乏シキヲ詔ヘ衣食ノ計ヲ爲サバルヲ得ザルヲ以テ。眼ヲ戴藉ニ注グ。餘暇無キヲ口實トシ。良師友無キハ學フコト得ズト爲ス所ノ青年ハ、是恰カモ遊手徒食ノ徒。資本無キヲ以テ。商業ニ從事シ難

シト爲シ。田畝ヲ有セザルヲ以テ。農タルニ由シナシトシ。坐シテ凍餓ヲ待ツト。大ニ異ナルコト無シ。視ヨ古來豪農大估。富ヲ陶猗ニ比スルニ至リシ者モ。其創業ノ祖ハ。僅少ノ資本ニ過ギズ。一世ノ泰斗タル大學士。多クハ學資ナキ貧賤ノ家ニ生レ。師友無キ荒僻ノ地ニ長ズ。然バ則チ資本ナク田畝無キヲ口實トシテ坐食スルモノハ。農商ノ産業ニ從事スルニ志シ無キ者ナリ。學資無ク師友無キヲ辭柄トシテ學バザル者ハ。學ニ志シ無キ者ナリ。然レハ則チ遊手者ハ。就産ノ資無キヲ憂ヘズシテ。就産ノ志無キヲ憂ヘヨ。無學者ハ。學資ト師友ノ乏キヲ憂ヘズシテ。唯就學ノ志無キヲ慨歎セヨ。苟モ之ヲ爲スニ志アラバ。何事力成ラザラシヤ。若シ然ラズトセバ。請フ古來豪富者ノ始祖ト盛名ノ

學士トヲ視ヨ。朱熹ノ所謂萬事成ラザル。須ク吾志ヲ責ム。
シトハ。真ニ確言ナル哉。

第廿三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ
事

成章ハ層城ト號ス。皆川淇園ノ弟タリ。幼ニシテ敏慧群兒
ニ異ナリ。九歳ノ夏。韓使來聘セシ時。韓人ト筆談ス。其妙齡
ニシテ才氣アリ。應答ノ速カナル。韓人亦大ニ驚嘆セリ。長
ズルニ及ビ。汎ク群籍ヲ涉獵シ。自ラ以爲ク。近キヲ舍テ。ハ
遠キヲ求メ。目ヲ賤ムデ耳ヲ貴ブ。ハ世人ノ常態ナリ。聖經
賢傳ト雖。氏外邦ノ事ノミ。若カズ。吾邦ノ典籍ヲ講習セシ
ニハト。是ニ於テ。國史律令ヨリ。家乘遺集ニ至ルマデ。遍ネ
ク搜求シテ。考覈セザルハ。無シ。又國風ヲ學ビ。其咏出スル

所。萬首以上ニ至ル。其詩ヲ賦スルヤ。能ク一夜ニシテ五言
律百首ヲ作クレリ。又其咏物ノ詩。本邦ノ故事ノミヲ用テ。
唐土ノ故事ヲ以テ材料トセザルハ。新井白石ガ。日本詩史
ニ載スル所ノ事ヲ咏ズルノ詩ノ外。亦見ザル所ナリトイ
フ。其造詣スル所知ルベキナリ。今左ニ其扇ヲ咏ズルノ詩
一首ヲ録ス。

開時蠟螭巧搖翅。榻去鷄鸞不發聲。大堰錦波春十里。弘微
繡帳月三更。賭棋秀娃裁詞藻。按譜才郎擅品評。秋自五絲
繁七骨。由來枉得合歡名。

櫻所子曰ク。近キヲ舍テ。遠キヲ求メ。目ヲ賤ムデ耳ヲ貴
ブハ。社會ノ通弊ニシテ。善ク希臘羅馬ノ歴史ヲ讀ムズル
モ。我邦ノ沿革ヲ知ラズ。徒ニ歐米ノ風俗ヲ尊信シテ。我邦

ノ習俗此ニ超駕スル者アルヲ覺トラズ。動モスレバ外人
狡獪詭智ノ擧ニ倣ヒ。我邦固有ノ良風美俗ヲモ、頑陋ノ弊
習ト併セテ之ヲ棄擲シ。玉石共ニ焚クニ至ラントス。豈ニ
慨然タラサルヲ得ンヤ。視ヨ佛人ハ。佛國ヲ稱シテ。歐洲文
明ノ中心トシ。英人ハ。英國ヲ稱シテ。地球最第一ノ國ト
米人ハ。其聯邦ヲ以テ。世界無比ト唱フ。其言稍偏倚スル
似タリト雖。氏亦愛國ノ心衷。言外ニ溢ル。今世輕佻ノ士。動
モスレバ歐米ノ文化ニ心酔シテ。自國ヲ輕視ス。何ゾ愛國
ノ心ニ乏シクシテ。遠ヲ求メ耳ヲ貴ブノ甚シキヤ。吁。成章
ノ如キ。識見アル者ト謂フベキナリ。

第廿四 藤釣寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事

藤釣字ハ景和。若冲ト號ス。享保二年。京都錦小路ニ生ル。家

商ヲ業トス。若冲幼ヨリ畫ヲ好ム。家貧富饒ナルヲ以テ。草
值ヲ吝マズ。古畫若千ヲ購テ。之ヲ學ノ。初メ狩野氏ノ畫ヲ
學ビ。其法ニ通ズ。自ハ以爲久是ハ狩野一家ノ法ニシテ。吾人
ヲ善クス。雖ドモ。狩野氏ハ。園蹟ヲ脱セズト。之ヲ告テ。
宋元ノ畫ヲ臨模スルノ年アリ。然カレ氏心ニ契ハズ。一日
大ニ省悟スル所アリ。庭前ニ坑ヲ穿テ。火ヲ活シ。年々
ズ所ハ。畫軸ヲ以テ。盡ク焚ク。如ニ付シテ曰ク。遠箇ノ故物
ゾ。肩ヲ古人ニ比スルコト能ハザランヤ。彼レモ物ヲ描クナ
リ。我亦其癖ク所ニ由テ描カバ。是物ト一層ヲ隔ツルナ
今ヨリ親ク物ニ就テ筆ヲ把ルニ。若カサルナリト。是ヨリ
諸禽蟲花卉ヲ熟視シテ。畫カント人。然レモ孔雀鸞鳳
類ハ。常ニ見ルベカラズ。唯司晨禽ハ。人家ニ畜フテ馴ル。

所物ニシテ其毛羽亦五彩ヲ施スベシ。先ヅ之ヨリ始メシ。數十ノ難ヲ慮下ニ畜養シテ之ヲ描キ、鍛鍊數年、遂ニ草木ノ華葉、羽毛鱗介ニ至ルマデ、寫生ノ妙ヲ自得シ、筆ヲ下シ、彩ヲ施ス、渾テ意匠ヲ以テ之ヲ成シ、聊カモ古人ノ法ヲ蹈襲スルヲ無シ、故ニ終生龍虎鬼神ヲ畫カズ、其繪事ニ耽ル此ノ如クニシテ、生産ニ疎キヲ以テ、家道零替シ、口ニ畫ニ擬スルニ至レリ、米一斗ヲ以テ一幀一換入、故ニ自ニ斗米庵ト號ス、

隱居子曰、若冲ノ繪事ニ志スヤ、初メ和漢ノ古畫帖ニ就テ、筆鍊多年、意ニ契ハズ、遂ニ碌々人ノ後ヘニ在ルヲ羞メ、更ニ實物ニ就テ精研シ、以テ寫生ノ妙訣ヲ自得スルニ至ル、今世口ニ經世濟民ノ學、強兵富國ノ術ヲ談バル、徒尚

ホ碌々人ノ糟粕ヲ哺ヒ、一隅ヲ恃テ前賢往聖ニ彷彿タルヲヲ思ハズ、翻テ他ヲ罵テ、獨立自主ノ氣象ニ乏シ、ト為ス、何ゾ其顔ノ厚キヤ、

第廿五 休翁晚年國歌ニ志セシ事

休翁ハ和泉國堺ノ豪商ナリ、茶儀ニ熟ヒリ、其奴僕ヲ遇スル骨肉ノ如クス、故ヲ以テ家道日ニ盛リナリ、或時京師ニ至リ、初メテ某大納言ニ謁ス、談國歌ニ及デ、大納言曰ク、汝ハ和歌ヲ學ベルヤト、曰ク、未知之ヲ學ハズ、曰ク、然ラバ我レ汝ヲニ語ラン、凡ソ一家ノ主翁トシテ、多クノ奴僕ヲ使役スル者ニシテ、心ヲ文雅風流ニ留ムルヲ無ケレバ、則チ其爲メ所偏固ニシテ、一片ノ和氣無シ、修身齊家ノ道ハ、和ヲ知テ和シ、禮ヲ以テ之ヲ節スルニ非レバ、人服セズ、且ツ、

夫、人、ト爲テ、文雅ハ心無ク、國風ハ何物タルヲモ知ラズ、
ンハ、則チ聲無キ、繪ヲ描畫ハ、綴、養マ、ト般ニシテ、高牆
大屋ハ主人タルニ似ズ、休翁聽キ了テ蓋テ且ツ憤心
アリ、即チ志ヲ歌學ニ傾ケ、遂ニ其妙境ヲ窺フニ至リ、休
翁或時古今和歌集ヲ繕久、其序ニ貫之ガ、東夷ノ哥ヲ評シ
テ、佑客ハ美服ヲ穿チタルニ譬ヒ、咏ズル所ハ其人タルニ
適應セザルヲ毀シレルヲ見懼然トシテ、已レガ分ナ曉ト
ハ、爾後復タ身ヲ絹帛ヲ纏ハズ、一家衣服ハ制ヲ嚴ニシ、羅
綺錦繡ハ言ハナ待タズ、衣帶袵裯ス、テ木綿ヲ以テ、尺
寸、雖ヒ蠶絲ヲ以テ織成セル物ヲ需用セザ、フシ、タリ、
其兒孫ニ及ズ、マデ、家道以テモ衰ハザ、ハ翁ガ儉素ノ
風ヲ遺フセシ由ルナラントイフ、

櫻所子曰ク、休翁晚年歌學ニ志シ、稍其堂奥ヲ燒フ、而シテ
古今集ノ序ヲ一讀シテ、忽チ儉素以テ其分ヲ守リ、德馨ヲ
兒孫ニ及ホスノ幸福ヲ得タリ、況ヤ經國濟世ノ學術ニ於
テチヤ、苟モ之ヲ活用セバ、其益ヲ得ル、豈啻ニ休翁ノ比ナ
ランヤ、

第廿六 糟谷半之丞篤志ニ由テ國風ニ長ゼシ事

半之丞ハ、參河國伊羅古ノ漁夫ナリ、村海中ニ斗出シ、地皆
ナ白洲ニシテ、農作スベカラズ、闔村漁ヲ以テ生活ヲ爲ス、
半之丞家甚ダ貧シク、風ニ父ヲ喪ヒ、善ク母ニ事フ、孝郷曲
ニ稱セラル、母嘗テ疾ム、之ヲ療スルニ效無シ、乃チ伊羅古
明神ニ禱ル、毎旦水ニ浴シ、裸跣往テ拜ス、祁寒酷暑、若ハ風
若ハ雨、未ダ嘗テ一日モ廢セズ、會、旅客アリ、社ヲ仰ヒ、テ扁

版ノ國歌ヲ誦ス。半之丞問テ曰ク、誦スル所ハ何事ゾ、曰ク
和歌ナリ。曰ク、是レ上古神明ノ傳フル所ナルカ、將タ人ノ
作ル所ナルカト、客笑フテ曰ク、亦人ノ作ル所ノミ、曰ク、學
ムテ能クス可キカ、曰ク、然リト。因テ略其法ヲ授ケ、且ツ曰
ク、歌ハ至誠ヲ以テ本ト爲ス。此ヲ以テ心ニ存シ、感觸シテ
言ニ發スレバ、以テ天地ヲ動カシ、以テ人神ヲ感ズベシト。
半之丞大ニ悦ビ、謝シテ還ル。茲レヨリ志ヲ國風ニ留メ、喜
悲笑驚凡ソ耳目觸ルハ所、心意動ク所、一ニ皆之ヲ詠歌ニ
發ス。半之丞本ト眼ニ一丁無シ、故ヲ以テ意餘リ、アツテ言
達セズ、人傳テ以テ笑實ト爲ス。而シテ半之丞恆ネニ曰フ、
卒然注ヲ祠前ニ受ク、吾歌必ス明神ノ冥贊ニ出ツ。然ラズ
ンバ、吾儕鄙人、惡シバ能ク斯ニ與カラシヤト、自ラ信シテ。

疑ハズ。其天資朴直ナルハ、大率ネ此ニ類ス。村淡路守戸田侯
ノ封邑ニ係ル、代官某國歌ヲ善クス。其志ヲ慕ミシ、時ニ往
テ古歌ヲ講授シ、且ツ其詠ズル所ヲ刪正シ、爲ニ國字ヲ書
シ與ヘテ之ヲ學バシム。居ル數年、詞稍修マル。則滿チテ代
官還ル。吉田驛藥舖ノ姫歌ヲ大納言芝山持豐ニ學ビ、名旁
近ニ噪ク。代官ニ繼デ講誨ス。業大ニ進ム。其合作ニ至テハ
天趣高絶。古人及ビ易スカラザル者アリ。或時姫一從テ京
都ニ至リ、大納言ニ謁ス。試ミニ命ジ、寄道戀ヲ詠セシム。納
言吟誦數回、稱シテ曰ク、是レ洵ニ純乎タル天籟、自然格ニ
入ル。患ヒ邪マ無キニ非ス。バ、何ヲ以テカ之ニ能クセン。
圖ラザリキ。古人ヲ令世ニ視シト、ハト咨嗟之。人シ、因テ
號ヲ磯丸ト賜ヒ、爲ニ之ヲ揄揚ス。名衣冠ニ噴々タリ、還ル。

二及テ遐邇傳稱シ以テ奇榮ト爲ス天使東下及ビ公卿
八東海ニ過グル者往々迂路其廬ヲ訪フ名聲隆々トシテ
起ル是ニ於テ土人相議シテ曰ク吾土僻陋ニシテ衣冠親
臨スルハ未ダ嘗テアラズ而シテ今始ハテアリト榮々
ハ大ナリ而シテ敗屋陋室ナル亦土人ハ辱ナリト因テ力
ニ戮ハセ貲ヲ捐テ屋ヲ構ヒ之ヲ與フ且ツ推シテ里正
ハ爲ス磯丸大ニ愕キ堅ク拒ムデ曰ク吾無能無識ニシテ
且ツ寒族タリ何ゾ敢テ當ランヤト衆強テ舍カズ因テ里
正ヲ辭シテ其居ヲ受ケ但名諒ノ過グル毎ネニ之ヲ此ニ
延ク去ルニ及ベバ輒チ鎖鑰シ家ニ還テ漁貝ヲ修繕シ兒
孫ト事ニ從フ未ダ嘗テ諷詠ヲ以テ務ヲ廢セズ磯丸嫁娶
事畢リテ江戸ニ遊ブ公侯爭テ之ヲ延ク速藤但馬守新見

伊賀守二氏尤モ之ヲ寵異ス常ニ二氏ノ邸ニ宿入小南文
亮高千春ト密友タリシトイフ
櫻所子曰ク磯丸僻郷ノ寒族然カモ本ト丁字ヲ知ラズ遂
ニ國風ヲ以テ名ヲ月卿雲客ノ間ニ揚グ是レ其居心制行
正直ニシテ語默動靜造次融沛意志ヲ國歌ニ注キ其諷詠
スル所思ヒ邪マ無ク三百篇ノ作者ト其妙ヲ同フスル所
以ナリ命意新ナリト雖氏措辭巧ミナリト雖氏言句ニ偽
飾ニ出ヅレバ假令太平ヲ粧點シ休明ヲ鼓吹スルノ一端
ニ供スベキモ何ゾ天地人神ヲ感動スルノ妙處ニ達スル
ヲ得ンヤ況ヤ假リテ以テ桃李ノ妖色ヲ賣リ花鳥ノ使音
ヲ通バルノ具ト爲スガ如キニ至テハ其風俗ニ害アル大
ナリ磯丸ノ事其篤志ト至誠トハ以テ學術技藝ヲ講習ス

ル者ノ模範ト爲スベシ。豈ニ特リ國風ノミナランヤ。

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事

佐藤隆岷ハ會津ノ人活菴ト號ス。少フシテ志氣ヲ負ヒ、名ヲ天下ニ成サント欲ス。其初メ鄉關ヲ出ル。自ラ誓テ曰ク、吾葵章ノ衣ヲ衣ズンバ。復タ生キテ還ラズト。葵章ハ即チ幕府ノ微鄒ナリ。江戸ニ來リ故人某ニ依ル。某ハ賈人ナリ。專ラ會計ヲ事トス隆岷久シカラズシテ乃チ去ル。然レ氏常居無シ。處上ヲ以テ高門雅子ノ家ニ客タリ喜ムテ書ヲ誦ミ。易論語老莊傷寒論。古今和歌集ヲ皆誦ス。最モ軒岐氏術ヲ好ム。其術ニ於テ自得スル所アリ。然レ氏其性善ク罵ルヲ以テ世ノ爲ニ容ラズ。僅カニ按摩ヲ業トシ。以テ活ヲ爲ス。時ニ以留橋ニ酒店アリ。鰻炙ヲ以テ名アリ。每暮

客三人アリ來リ喫ス。鰻一鰻酒一鉢。是ノ如クスル者數歲。未ダ嘗テ一タモ之ヲ廢セズ。主人恠ムデ之ヲ問フ。皆云フ吾輩風志アリ。成ラバ。ルヲ恐ル。故ニ此ニ藉リ。以テ氣カヲ助ケルハ也。三人其二ハ行商其一ハ隆岷ナリ。之ニ久ノシテ隆岷一屋ヲ芝濱ニ僦シ。既ニ屋值ヲ與フ。屋主更ニ酒資ヲ索ム。應ゼズ。則チ中ルニ冷語ヲ以テス。隆岷大ニ怒テ之ヲ罵ル。偶ニ任俠某ノ過ギ觀ルアリ。曉諭兩解ス。遂ニ隆岷ヲ引リ歸リ。款待甚ダ至ル。某多ク拳勇少年ヲ養ヒ。號シテ兇分ト曰ク。是ニ於テ人ニ告ゲテ曰ク。吾奇兒ヲ得タリト。隆岷之ヲ聞キ罵テ曰ク。吾豈ニ汝輩ノ養子タルヒナラシヤト。某謝シテ留ム。肯ンゼズ。袂ヲ振テ去ル。初メ荒川土佐守ノ妻疾ム。丁十餘年。醫藥一効無シ。隆岷ヲシテ之ヲ診

トシテ試ミニ處劑如何ト問フ。隆岷忽チ罵テ曰ク。君ハ醫
人ニ非ズ。烏ゾ醫術ヲ知ラシ。然レモ吾ガ術疎ニシテ人
爲ニ信ゼラレズ。亦愧ルニ足ル。今即チ拳ヲ奮テ藥籠ヲ
打破シ。保然トシテ去テ顧ミズ。上佐守曰ク。奇士ナリ。術モ
亦應サニ奇ナルバシト。乃チ疾ヲ治セシム。遂ニ痊ユ。然ル
後チ醫名大ニ發ス。上佐守清水府ノ老ト爲ルニ及ビ。建白
シテ其侍醫ト爲ス。是ニ於テ隆岷葵章ノ衣ヲ賜ヒ。果シテ
其誓ヒヲ遂ゲ。向キノ二商モ亦各其志ヲ成スト云フ。
櫻所子曰ク。舊幕ノ時葵章ノ衣ヲ服スル。未ダ駟馬ノ車ニ
比スベキニアラザルモ。亦以テ衣錦ノ榮ニ視ラフマシ。隆
岷東阪ノ一布衣ニシテ。其郷土ヲ去ル。葵章ノ衣ヲ衣ズン
ハ。復タ生還セザルヲ誓フ。其志ヲ立ツル小ナリト謂フヘ

カラズ。而シテ其性善ク罵ルモ。固ヨリ美德ニ非ズト雖
氏之ヲ門ヲ掃ヒ塵ヲ拜シテ。俸給ヲ得ントスルニ汲々タ
ル者ニ比スレバ。固ヨリ日ヲ同フシテ論ズベキニ非ズ。且
ツ人ノ爲メニ知ラレズ。按摩ヲ以テ生計トスル。數年ノ久
キニ及ブガ如キ。亦耐忍ノ至レルモノニアラズヤ。其狷介
ニシテ世ニ阿ラズ。言行ノ奇ナルヲ以テ。遂ニ荒川土佐守
ノ知ル所トナリ。葵章ノ衣ヲ衣ル。誓ヲ遂グルニ至ル。亦
奇遇ナリト謂フベシ。我便依ヲ以テ榮華ヲ博セントスル
者アルヲ視ル。而シテ狷介ニシテ且ツ善ク罵ルヲ以テ利
達ヲ得ル者ハ。隆岷ニ於テ始メテ之ヲ視ル。是蓋シ其志操
ト勉耐ト。尋常ニ超出スル方致ス所ナリ。

第廿八 山岡紀一郎志ヲ槍法ニ專ニシタル事

山岡紀一郎靜山ト號ス。江戸ノ人家世、幕府ニ仕フ。其人トナリ剛直ニシテ阿ネラズ。朴素ヲ重シシ。氣節ヲ尚トブ。靜山幼キ時刀槍射騎水泳讀書習字發憤勉勵セザルハ無シ。年十九ノ時省悟スル所アリ慨然トシテ曰ク我レ今ヨリ精ヲ專ラニシ槍ヲ學バンハト。二十二歳ニ及ビ名都下ニ轟ク用ユル所ノ長槍必心槍ト曰フ。其源管丞相道真ヨリ出ヅト云。是時ニ當リ筑後ノ人南里紀介枝ヲ以テ海内ニ鳴ル。靜山就テ問フ。南里將サニ國ニ歸ラントスルヤ。靜山ト一タビ較ベ。以テ訣別ヲ告ゲント欲ス。是ニ於テ試法ヲ相較ス。辰ニ起テ午ニ至ル。神出鬼沒輸贏未タ判ゼズ。操ル所ノ各槍鋒尖摧破シテ寸餘無シ。以テ靜山ノ技當時ノ槍術者流ガ精神活潑妙機ヲ失シ。血戰ノ實境ヲ遺レ徒

ニ花法美觀ヲ務ムル者ト相同シカラザルヲ見ルニ足リ。嘗テ疔ヲ鼻下ニ發ス。痛甚シ。技ヲ操ル常ノ如シ。盤之ヲ止ムレ氏聽カズ。月餘ニ愈ユ。又瘡ヲ患フ。顫起ル毎ニ場ニ入テ弟子ト技ヲ較ス。此ヲ以テ瘡ヲ去ル。靜山操ル所ノ木槍重廿四斤ナル者。七斤ナル者。十五斤ナル者アリ。其槍ヲ學ブ。勉強凡ニ非ラズ。嘗テ昇平日久フシテ士風ノ柔惰ナルヲ慨シ。自ラ古ノ士ニ企及センヲ期シ。緩急用ニ應ジテ國難ニ徇ヒ。以テ士職ヲ盡シ。丁ヲ庶幾スルヤ。嚴冬寒夜繩ヲ以テ腹ヲ約シ。冰ヲ敲キ水ヲ灌ギ。滿身淋漓タリ。東ニ向テ日光廟ヲ拜シ。叩首默禱。丑時場ニ入リ。十五斤ノ槍ヲ操リ突衝ノ勢ヒヲ作ス。丁一千回。三十夜ヲ極メテ止ム。毎年此ノ如シ。平居晝ハ門人ニ教授シ。夜ハ則チ突衝ノ

勢ヲ作ス。三千。或ハ五千。或ハ黄昏ヨリ雞鳴ニ至ル。三萬ニ及ブ。嘗テ竹七八尺許リヲ斫リ之ヲ把リ高擧テ踏ム。弟子ト試較ス。槍ニ異ナラズ。或ハ鐵扇ヲ操リ以テ槍手ニ敵ス。靜山技術既ニ神秘ト稱ス。又德義ヲ以テ聞ユ。嘗テ西郊ノ佛寺ニ賽ス。衆アリ二十人バカリ。一人ヲ圍繞シ。拳捷交下ル。鮮血淋々死ニ垂ントス。靜山衆ニ謂テ曰ク。何物ノ狂奴ゾ。敢テ毆撃ヲ行フト。地ニ僵ル。者哀叫シテ曰ク。山岡先生請フ我ヲ救ヘト。靜山衆ニ對シテ懇諭ス。凡ヒ聽カズ。是ニ於テ群中ニ突入シ。喝シテ曰ク。窮鳥懷ニ入ル。獵夫殺サズ。況ヤ士人ノ救ヒヲ求ム。而シテ我豈坐視スルニ忍ビシヤ。汝ゾ敵ハ即チ我ナリ。請フ來テ我ト戰ヘト。衆敢テ動カズ。靜山地ニ僵レタル者ヲ視レバ。乃チ舊ト嘗

テ贊ヲ執リ我ヲ習ヒ。後チ背キ去リシ者ナリ。其人金ニ衆ニ借テ還サズ。故ニ今此地ニ遺ル。靜山金ヲ懷テ取リ其負債ヲ衆ニ償ヒ別ニ數金ヲ取テ其人ニ與ヘ規箴ヲ加ヘテ之ヲ遣ル。靜山嘗テ人ニ語テ曰ク。凡ソ人ニ勝タント欲スレバ。須ク先ヅ德ヲ已レ。ニ修ムベシ。德勝テ敵自ラ屈ス。是ヲ之レ真勝ト爲ス。若シ技藝ハ擊刺ニ由テ得可シト謂ハバ。則チ大ニ謬レリ。故ニ精シカラント欲スレバ。須ク先ヅ飲酒遊行ヲ禁スベシ。必ヤ時トシテ精神ヲ收メ存セザルハ。無ク往クトシテ着實事ヲ行ハザルハ。無シ。則チ欺瞞ニ臻ル。庶幾ス可キナリト。又曰ク。人ノ宜ク戒ムベキ者ハ驕傲ナリ。一驕心一入レバ。百藝皆廢ス。既往チ回視スレバ。我モ亦免カレズ。一念此ニ至ル毎ニ慚汗背ヲ冷ホスヲ覺エ

先ダツ一日、母氏靜山ノ重槍ヲ使フヲ視、其太ダ億ル
 ヲ患フ。靜山曰ク、兒之ヲ操ル手槍ト異ナル無キナリト。翌
 日曉ヨリ諸弟子ト操習スル常ノ如シ、但、肉色頗ル白ク、肌
 膚澤無キヲ見、弟子以テ告グ。靜山笑テ言ハズ、是日ニシテ
 卒スト云フ。

櫻所子曰、攝人市村水香ガ釣魚記ヲ讀ム、其文ニ曰ク、吾家
 瀬江ニ瀕ス、江ニ一漁者アリ、釣鯉ニ工ミナリ、他人及ブ能
 ハズ、吾嘗テ其術ヲ問フ、漁者曰ク、他無シ、專ト精ト、二在、ハ
 ハミ、初メ余ノ釣鯉ヲ學バヤ、終日ニシテ一ヲ獲ズ、是ノ如
 キモ、數十日退テ之ヲ思フ、曰ク、是餌ノ香シカラザルナ
 リ、器ノ良カラザルナリト、乃チ其餌ヲ香バシラシ、其釣

竿トナ良クシ、往テ釣ル、又獲ル所無シ、是ノ如キ者數十日
 退ラ再ビ思フ、曰ク、是レ徒ニ餌ノ香バシキノミ器ノ良キ
 ノミ、未ダ其方ヲ獲サルナリト、是ニ於テ晨起江ニ到リ、左
 視右顧、水ノ深淺ヲ測カリ、鯉ノ游泳ヲ窺テ釣ル、須臾ニシ
 テ大鯉魚アリ、潑刺トシテ釣ニ上ボル、是レヨリ復々産餌
 無シ、世ノ江ニ釣ル者、鯉ヲ釣テ獲ザレバ、輒チ去テ鯉ヲ釣
 ル、鯉ヲ獲ザレバ輒チ去テ鯉ヲ釣ル、終ニ一ヲ獲ル能ハズ、
 是豈釣魚ニ拙キノミナランヤ、其心事ヲニシテ思ヒ精
 フザレバナリト、再之ヲ聞テ感ズル所アリ、世ノ藝ヲ學ブ
 者、書ヲ學ムデ成ラザレバ、輒チ去テ文ヲ學ビ、文ヲ學ムデ
 成ラザレバ、輒チ去テ詩ヲ學ビ、畫ヲ學ブ、其心專ラナラズ、
 思精ナラザル、是ノ如シ、宜ナル哉、其成ル所無キヤ云々

我此文ヲ讀ムテ以爲ク斯言ヤ、以テ能ク今世人士ノ膏
肅ヲ鑒スルニ足ル者ニシテ、韓昌黎ノ所謂外慕業ヲ徒ハ
者ハ、皆其堂ニ造タルス、其裁ヲ嘖ハドハル者ハ、トノ意
符合ス、實ニ警世ノ文字ナリト、然ル、靜山年僅カニ十九
ニシテ、早ク已ニ茲ニ見ルアリ、讀書習字、射騎水泳ノ諸科
ヲ舍テ、專ラ槍法ノ一技ヲ責ム、卓見ト謂フベキナリ、ハ
藝アルハ、皆十語ル可シトイフ、亦宜ナル哉、今世ノ少年
才子ガ、朝夕ニ英籍ヲ翻ヘシ、タマニハ佛籍ヲ繕キ、時トシ
ハ漢籍ヲ學ビ、又ハ曾獨ノ語學ニ轉ジ、暇アレバ則チ書
法ヲ攻メ、畫本ヲ披キ、碁局ニ對シ、百藝悉ク通セント欲
テ、一トシテ其堂ニ造ル能ハズシテ、身ヲ終ノルコト曉
ラザルガ如キ、靜山ト漁人ハ爲ニ笑ハレザル者、幾ンド希

ナリ、且夫靜山ガ、其德勝テ敵自カラ屈ストイヒ、技ニ精ハ
ラント欲ス、ハバ須ク飲酒遊行ヲ禁ズ、シトイヒ、一驕心
ニ入レバ、百藝皆廢ストイフガ如キハ、蓋シ實踐ニ得ル所
ノ言ニシテ、古賢前哲ノ訓誨ニ密合ス、亦以テ一技一藝ニ
長ゼント欲スル者ヲシテ、其品行ヲ慎シマシメ、其驕慢ノ
隆準ヲシテ、低クカラシムルニ足レリ、而シテ其勉強刻苦
心クモ懈ラザル、歿スルノ日ニ及ブマデ、重槍ヲ揮ヒ、諸弟
子ト操習セリトイフガ如キ、後進ノ士ヲシテ、一讀ノ下ニ
感發奮興スル所アラシム、吁、靜山亦豪傑ノ士ト謂フベキ
ナリ、

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰エテ學ニ志セシ事
幕府政ヲ失フ、時ニ當テ、尊王攘夷ヲ首唱セル所ノ傑士、

先後競テ起ル。而シテ海内ノ士、人才ヲ論ズル者、先ヅ指ヲ
藤田東湖ニ屈ス。東湖ハ即チ斌卿ノ號ナリ。斌卿ハ常陸ノ
人世、水戸藩ニ仕フ。斌卿幼ニシテ奇穎、稍長ジテ武藝ヲ嗜
ミ、甚ダ讀書ヲ喜バズ。日ニ馬ヲ馳セ、劍ヲ試ム。年弱、所ハ踰
エ、慨然トシテ、自ラ奮テ曰ク、蜂、無ク、隨陸武無キ、古人
ハ、笑フ。所、丈夫何ゾ學バザ。ト、遂ニ刻苦書ヲ讀ミ、父
ノ喪ヲ守ル。進物番ニ補シ、章考館編修ト爲リ、總裁事ヲ
攝ス。斌卿書ヲ總裁ニ致シ、館中ノ五事ヲ論ズ。文辭雄健ナ
リ、人始メテ其カヲ學ニ專ラニセシ。ト、知ル。黃門齊昭ノ
初メ封ヲ襲フ。斌卿ノ異才アルヲ知リ、擢デ、郎奉行ト爲
ス。三々ビ遷テ側用人ニ至リ、馬廻番頭ニ班ス。侯方ニ藩
ノ人才ヲ網羅シ、内外ニ布列シ、皆號シテ職ニ稱フト爲ス。

而シテ古今ニ通ジ、事體ニ達スルニ至テハ、則チ斌卿蓋シ
之ガ冠タリ。故ニ侯ノ眷遇尤モ渥シ。入ラハ則チ機密ニ參
與シ、出テハ則チ四方ニ應對シ、議論風生ジ、事留滯無シ。侯
新令ヲ出ス毎ニ斌卿一ニ筆ヲ秉リ、頃刻ニシテ成ル。辭理
明暢ナリ。當時水戸藩文武ノ士、其人ニ乏シカラズト雖、斌
卿ヲ推シテ全才ト爲ス。侯ガ施爲人ノ意表ニ出デ、人ノ耳
目ヲ驚カセシ者、斌卿尤モ力アリトス。以テ元年斌卿罪ヲ
獲テ、小梅村ノ別墅ニ屏居ス。爾後專ラ學ヲ攻メ、群書ヲ覽
閱ス。數歲ニシテ郷里ニ歸ルヲ聽ルサレ、尋テ亦親故ト往
來スルヲ得、遠近教ヲ乞フ者、日ニ門ヲ填ム。嘉永六年、侯命
ヲ幕府ニ受ケ、防海ノ政ヲ議ス。乃チ斌卿ヲ召ス。江戸ニ至
テ原職ニ復ス。天下風采ヲ相望ス。而シテ斌卿夙トニ尊攘

大義ヲ主張ス然レ氏持論トスル所或ハ時ト牴牾スト
雖氏報國ノ誠ハ則チ確然トシテ撓マズ候又斌卿力才文
武ヲ無スルヲ以テ命ジテ學政ヲ總督セシム幾クモ無ク
江戸地大ニ震フ斌卿是日ヲ以テ歿ス享年五十即チ安政
二年十月ナリ
櫻所子曰ク東瀛ガ尊攘ヲ主唱シ名聲一時ニ聞タル者常
ニ異能ノ士ヲ延キ酣暢談論シ時ニ或ハ詩賦唱酬詞采煥
發能ク憂國ノ志士ヲシラ一讀ノ下ニ切齒扼腕セシムル
者アルニ由レリ而メ其學ニ志スハ弱冠ヲ踰ユルノ後ニ
在リトス年已ニ長ジタルヲ以テ學ガ能ハズト謂フ者何
ゾ慨然トシテ自ラ奮ハサルヤ
日本立志編卷二終

文部省檢査濟小學教科書及新刻目錄

- | | | | | | | | |
|---------------------------|--------------------------|--------------------------|-------------------------|------------------------|--------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 松本英忠著
一 小學農家讀本
全三冊 | 高山直道著
一 小學生徒心得
全二冊 | 松本英忠著
一 小學商家讀本
全壹冊 | 永田方正譯
一 植學啓蒙
全三冊 | 橫関剛著
一 由氏植學書
全三冊 | 全
一 修身學階梯
全二冊 | 伊藤正信譯
一 修身學教授本
全十二冊 | 氏唱初學人身究理
全二冊 |
| 岩城良太郎編輯
一 算學問題集
全四冊 | 志賀泰山譯述
一 平面幾何學
全二冊 | 丸川貫一編
一 算數五百問題
全一冊 | 楠本小六編述
一 明治史畧
全四冊 | 同
一 續篇
全四冊 | 石井鈞三郎編
一 作文教授法
全一冊 | 小原熊雄譯述
一 算級數例題
全一冊 | 中條清澄譯述
一 算學求積法
全一冊 |
- 發兌書舖
大坂南久寶寺町
四丁目八番地
前川善兵衛

